



靖國神社神門の「菊の御紋」と桜



第140号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会  
 編集人 金子敬志  
 発行人 石井光政  
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言	理事	藤田幸生	2
各地慰霊祭参加報告			
第43回特攻隊全戦没者慰霊祭	編集長	金子敬志	3
宮崎県護國神社「特攻勇士慰霊祭」	専務理事	石井光政	7
会員等投稿			
靖國神社は普遍性を有す	会員	鈴木くにこ	8
多田野語録	会員	多田野弘	11
郷土の身近なる特攻史	理事	福江広明	17
陸軍航空特攻の「別盃」について	会員	大槻健二	27
陸軍特別攻撃隊に捧ぐ	元会員	高橋圭子	33
顕彰譜(6)			34
連載 山ある記18	会員	池田康博	38
芸欄 歌俳柳の広場			
短歌・俳句・川柳			39
事務局からの報告等			
令和3年度事業報告書			40
会報記事の訂正			42
寄付者等の報告			42

挿絵提供 空自OB 宇山氏

## 「巻頭言」

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長

藤田 幸生



風薫る五月です。世は、生氣に満ち溢れています。

しかし、その一方で、人の世は、中国武漢発新型コロナウイルス禍や、ロシアのウクライナ軍事侵攻等の情報で、混乱が続いて居ます。

そんな中、我が日本国は、多少の混乱がありながらも、この恵まれた気候、地勢、風土の中で、何とか無事に過ごしております。時の流れは絶えずして止まらず、淡々と経過しております。感謝です。

「この時」を、「長い」と思えるか、「短い」と感じるかは、個人の置かれた環境や、考え方次第では、ないでしょうか？

時の単位は、秒、分、時から、日、月、年、世紀、時代……果ては、古生代の「紀・期」という単位もあります。

生き物には全て、「寿命」というものが、与えられています。短命で、世代が入れ替わるものや、屋久杉のように長寿で、長生きするもの等、様々です。限度があります。

近年では、人の寿命も延びて、100年を超える人も、増えてきています。

さて、そこです。時間の長短についてです。

多くの特攻隊員達は、二十歳前後の若者でした。「短い人生で、可愛そうだ！」と言われていきます。私も、実は、そう想ってきました。そうして、コロナ禍の中で、身辺整理、終活をしながら、よく考えてみました。

そうしたら、「時の流れの中で言えば、20年も、80年も、大差は無く、宇宙での長大な時の流れの中では、ほんの一瞬に過ぎないのではないか？」と、言うことに気付かされたのです。

その長さよりも、もっと大切なことは、「如何に、真剣に時を過ごしたか？生きたか」と、いうことではなからうか？……ということでは、

人の人生には、「十人十色」で、色々あります。しかし、その中で大事なことは、「自分に与えられて時代・環境の中で、如何に真剣に生きるか！」と、言うことではないでしょうか！ 不平や、不満ばかり言っても仕方が無いことでは！

「特攻隊員」から、私が学んだ教えであります。



第43回特攻隊全戦没者慰霊祭

編集長 金子 敬志

令和4年3月26日(土)に靖國神社において齋行された第43回特攻隊全戦没者慰霊祭は、新型コロナウイルスの状況に鑑み、昇殿参拝のみとし、懇親会は無しとして齋行されました。

一 慰霊祭

令和4年3月26日(土) 11時〜12時

於 靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌演奏

トランペット

堀田 和夫  
牟田 春雄

修抜、献饌、祝詞奏上

祭文奏上 理事長

献 吟 一誠流

龍 笛

藤田 幸生  
吉野 一心  
安藤 一感

●海上挺身隊第26戦隊 久司 博敏 作

昭和二十年五月二十五日 海上戦闘終了後沖縄県

首里付近で戦死

若桜国の鎮めと散りしとも

永久に咲きませ靖國の花

●菊水6号第2魁隊 四方 巖夫 作

昭和二十年五月十一日 指宿発進 沖縄周辺で戦死

天翔ける時に来にけりおおいなる

やまとしまねを吾は守らん

献 奏「鎮魂同期の桜」 「海ゆかば」

トランペット

堀田 和夫  
牟田 春雄

本殿参拝

玉串奉奠(遺族・来賓等参加者代表)

黙 禱 「国の鎮め」

御遺族7名(同伴者を含め9名)を始め御来賓、戦友、一般会員等を合わせて

164名の方々が参列し、英霊に哀悼の誠を捧げました。

また、参列は出来ませんでした。玉

串料をお送り頂いた213名の方々の玉

串料は、御芳名を添付して当日参列され

た方の分と合わせて靖國神社に収めさせ

ていただきました

二 特攻勇士之像への献花

本殿参拝後、参加者は遊就館前の特攻

勇士之像の前に集まり、代表者による献

花と共に手を合わせた後、来年こそは制

限の無い慰霊祭が開催されることを願っ

て解散しました。

祭 文

特別攻撃隊で戦没された、ご英霊の皆

様に申し上げます。

3年ぶりに多くの方にご参集いただき、

ここ、靖國神社の社頭において、お参り

することが出来ますことに、心から感謝

申し上げます。

皆様方は、大東亜戦争末期の我国の存

亡の時に際し、ご家族、ふるさと、そしてこの日本を守るために、空に、海に、陸に、自らの身を賭して、散華されました。

亡の時に際し、ご家族、ふるさと、そしてこの日本を守るために、空に、海に、陸に、自らの身を賭して、散華されました。

正に、日本人の崇高な精神「利他」を、身をもって示されたものです。

このことは、我国のみならず、人の世に、燦然と輝く、語り継ぐべき偉業として、残されてきております。

私達は、皆様方に対し、心からの感謝と、敬意を奉げます。

皆様方のお陰で、現在の平和で繁栄した日本があり、そして、国際社会の中でも、平和国家として、その存在価値が認められ、人類発展のために、貢献してきております。心ある外国人の人々も、そのことを十分認識されております。

昨年、コロナ禍でありましたが、オリンピックを成功裏に開催し、日本の底力を内外に示すことが出来ました。

我国は、先の大戦で、死力を尽くした戦をしました。結果として敗れましたが、その後、この七十有余年の間、武を収め、

平和平穩を維持して参りました。そして、地球上で奇跡といわれるような発展を遂げております。このことは、世界の歴史

上、類を見ないことであります。

ただ、この間にも、ロシアによるウクライナ侵略に見えるような、民族、宗教、

主義主張、国境等による争いや戦争が、絶えたことはありません。その戦いは、宇宙、サイバー空間にまで拡大し、絶えることなく続いております。

その抗争、紛争、戦いの様相は、その物理的能力の拡大が、人類の精神的制御能力を逸脱超越しそうな勢いで、広域化、強大化してきているように伺えます。

皆様は、七十有余年前、祖国日本の不滅と最後の勝利を確信し、より良い日本を建設すべく、国家国民のために一身を捧げられました。皆様の示されたこの精神こそ、常に国を護り、国を興す底力であり、身を以て範を示されたものと信じてやみません。

私たちは、これからもご英霊の皆様の志を守り、粉骨碎身、ますます努力し、日本の平和の維持、発展と文化の継承に努める所存です。

世界の情勢は、今、正に激動の中にあります。在天の皆様、どうか私達をお見守りください。そして、お導き下さい。皆様方の、安らかならんことをお祈り申し上げます。祭文といたします。

令和四年三月二十六日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田幸生

この度、第43回特攻隊全戦没者慰霊祭の開催にあたり、会の皆様方のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に特攻隊全戦没者に想いを馳せ、日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長” こと  
参議院議員

佐藤 まさひさ

慰霊祭

お届け台致名 「誓心」  
お届け日 二〇二二年の三月二十四日

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会 御中

国のため、勇戦敢闘して散華された殉国の御霊にたいし、謹んで感謝と追悼の誠とささげ、心よりご冥福をお祈りいたします。恒久平和を願いつつ、合わせて慰霊祭にご尽力されました関係各位に敬意を表しますとともに、ご参列のみなさまのご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

公益財団法人偕行社  
理事長 森 勉

第四十三回特攻隊全戦没者慰霊祭のご実行にあたり、

平和の礎とされました尊い御霊に対し、

また、コロナウイルス感染症下の中、ご参行に際し、

ご尽力賜りました関係各位に、心より感謝を申しあげま

す。

我が国の今日の平和と繁栄をもたらしたものは何であつた

のか、いま改めて思う時、世界に目を向ければ未だに紛争

が堪えず、罪のない大切な命が失われ続けています。時代

の変化の中で苦しみや悲しみはそれぞれにありますが、ご英霊

の皆様は二度と私達と同じような遭難を出してはならない

という固い決意を持たせ、困難を乗り越えてゆく力を後世

に残されたのだと、私も戦没者の遺見の一人として新たに

痛じております。

平和の尊さ、命の大切さを後世に語り継いでいかなければ

なりません。

皆様方には「平和を語り継ぐ者」として、今後とも未永く

お力添えいただければ幸いです。

結びに、ご参集の皆様方のご健勝、ご多幸を心より祈念い

たします。

一般財団法人 日本遺族会会長  
参議院議員 水 落 敏 崇



藤田理事長による祭文奏上



拝殿に着席し神事の開始を待つ参列者



献吟



拝殿から本殿に向う



特攻勇士之像への献花

宮崎県護國神社「特攻勇士慰霊祭」参列  
報告

専務理事兼事務局長 石井光政

令和4年3月28日(月)15時から、宮崎県護國神社の「特攻勇士之像」前にて、当神社の山田雄徳禰宜を祭主として、第4回特攻勇士慰霊祭が斎行され、参列してきましたので報告します。

当日は雨も心配されましたが、降られることもなく、満開の桜の下、コロナの影響で限定された人数でしたが、中野一則宮崎県議会議長をはじめ、隊友会、偕行会、遺族会、護國神社総代の皆様など約20名が参列し、宮崎県出身の特攻隊員(航空特攻第1号と言われる、関海軍大尉の敷島隊4番機として散華された、永峯肇飛行兵曹長を含む海軍49名、陸軍28名の合計77名)の英霊に感謝の誠を捧げました。

なお、この日の午前中に、宮崎空港の滑走路西端にある、宮崎特攻基地慰霊碑「忠魂碑」を参拝しました。ここは、毎年4月の初めに、宮崎特攻基地慰霊碑奉賛会が慰霊祭を斎行し、わが顕彰会も参列させていただきますが、今年もコロナの影響で、実行委員会の皆様だけの規模を縮小しての開催となったため、靖國神社からのお神酒を捧げて参拝してきました。

た。  
来以降はコロナも落ち着き、各地の慰霊祭が多くの皆様が参列いただけるようになることを祈らずには居られませんでした。



桜の宮崎県護國神社



宮崎特攻基地慰霊碑「忠魂碑」



祭主、山田禰宜と特攻勇士之像

本記事は、靖國神社社報「靖國」令和四年二月号より、鈴木くにこ様と靖國神社のご承認を得て加筆修訂の上、転載するものです。

### 執筆者紹介

慶應義塾大学法学部政治学科首席卒業。外務省入省。国際報道課及び在仏日本大使館勤務。国会議員（中山太郎元外務大臣）秘書や東京大学特任助教、NPO法人岡崎研究所主任研究員等を経て、現職。著書に、『オリンピックと日本人の心』、『歴代首相物語』等。

靖國神社は普遍性を有す

（外交・安全保障研究家）鈴木 くにこ



靖國神社に対しては、一部の国が外交問題化させたり、マスコミ等が悪く語ったりすることがある。しかし、事実は異なるのではないか。実際、靖國神社は国

民にも外国人にも親しみやすい場所になってきているようである。

靖國神社は私にとって身近な場所となり、時々参拝させて頂いている。八月十五日、春秋例大祭、みたままつり他、人もまばらな日常の静かな境内にお参りすることもある。そんな時、近年ますます外国人の参拝者の姿を多く見かけるようになった。アジア系もいれば欧米系の人々も、家族や友人、一人で来訪する等、様々である。COVID19（新型コロナウイルス）で外国人の訪問が少ない時期である。靖國神社の境内で中国語を含む外国語を耳にすることもあった。

そんな中、ふと思いつくのが、かつて「日韓青年フォーラム」の参加者で靖國神社に参拝した時のことである。「日韓青年フォーラム」は、日韓両国を訪問して会議や現地研修を通して交流を深めるものであった。ある年、日本を訪問する際の現地研修の一環で靖國神社参拝が企画された。皆で靖國神社の方から説明を伺い、その後、昇殿参拝をした。韓国の参加者も一人（現役の大統領府高官）を除いて全員が昇殿参拝を行った。そして、厳粛な昇殿参拝を終えた後、韓国人の参加者から次のような言葉が発せられた。「国家のために命を捧げた方への追悼は、

国それぞれの方法があつて良いと思う。そう感じた。」と。いつも慰安婦問題等では厳しい意見も出す参加者だったが、実際、参拝をされての感想は穏やかなものだった。

このエピソードで想起するのが、筆者が一九九七年～一九九九年にかけて携わった「日米韓安全保障対話」（故岡崎久彦大使が所長を務めていた岡崎研究所主催）の会議で江田島の海上自衛隊第一術科学校（海軍兵学校跡）内にある教育参考館を訪れた時の事である。日本の有識者の他、韓国からは元外務大臣、元海軍将校、後に閣僚や大使となる大学教授らそうそうたるメンバーが参加した。筆者は、館内の遺書を含む展示を静かに見るうちにポロポロと涙が出て来てしまい、恥ずかしくて先に屋外に出て来てしまった。外で待っていると、ゆっくり真剣に展示物を見終えて出て来た韓国の軍人さんが最初に言った言葉が、「日本の軍人さんは偉かった。」という一言だった。聞くところによると、筆者のみならず、ほとんど全ての参加者が涙なしには見られなかったそうだ。

教育参考館横には、真珠湾攻撃に使用された特殊潜航艇も展示されている。ある時、米国人の安全保障専門家は、同館を訪問しての感想として、「日本も米国

も同じだと思った。天皇陛下万歳ばかりかと思っていたら、遺書に綴られていたのはお母さん等家族のことが殆どだった。家族愛は変わらない。泣けました。」と述べた。

もう一つ、中国のシンクタンクと岡崎研究所で行った「日中安全保障対話」についても触れておきたい。二〇一七年、上海でのことだが、中国の若手エンジニアで日本語も分らない者が、通訳を通して筆者に話してきたことがある。彼は、一九四五年沖繩戦における太田實中將の「沖繩県民斯克戦へり…」の話を読んで感動したと言うのである。

日本の軍人に対する尊敬の念等は、敵味方、国籍、時代に関係なく、同じようにあるのである。逆に、それを忘れ(させ)ようとしているのが日本の一部マスコミヤ勢力であることが不思議でならない。家族や国家を思う気持ちは人類共通の感情のようである。国家のために命を捧げた方に哀悼の意を捧げるのは自然の行動である。

『日韓共鳴2000年史』の著者である名越二荒之助先生は、生前、朝鮮半島出身の特攻隊員と靖國神社について書かれている(『史実が語る日本の魂』)。名越先生は、特攻出撃した朝鮮人十五名

一人一人について調べ、「胸が締め付けられるほど感銘を受けた。」と述べられ、彼らの主な動機は、「日本国民としての責任と、朝鮮男児の気概を示しておきたかった。」ことにあったと記している。

お父様が特攻の生き残りだという友人と色々話をした事がある。そこで気づいたのは、彼女のお父様は人を殺すために特攻志願したのではなく、人を救うために志願したということだった。

靖國神社の遊就館の傍らに、特攻隊員の像がある。境内に多くの参拝者がある日でも、車の蔭に隠れ、意外と気づきにくい所である。そこには、五八四三名が特攻勇士として散華されたことが記されている。思わず手を合わせずにはいられない。

令和三年(二〇二一年)師走、この原稿を書いている最中、「真珠湾攻撃から



遊就館傍らの特攻隊員の像

八十年」の日がやってきた。この日を、米国では、「真珠湾メモリアル・デー」としている。その日、米国人と結婚し米国社会に溶け込んで生活している友人が一枚の写真を掲げて短文を綴った。その写真は、若き十代の日本の特攻隊員が出撃前に犬を囲んで穏かに記念撮影した一枚だった。「真珠湾の日に、私は、世界中の全ての戦争の犠牲者に追悼の意を捧げたい。そこには、十代で神風となった若き者たちも含む。二人の息子の母として」そんな内容のメッセージが英文で書かれていた。

同日、米国海軍では、新しい駆逐艦を「ダニエル・イノウエ」と命名する式典が挙行された。日系米国人として第二次世界大戦の欧州戦線で片腕を失くし、戦後は米国下院議員、上院議員として、国の為、また日米関係の発展のために尽力



犬を囲む特攻隊員

された方である。沖繩問題で日米同盟が揺れる時期に、米国議会で一度お目にかかったことがある。真珠湾攻撃八十周年の日に、米国がダニエル・イノウエ議員に敬意を表した大きな出来事には、特別の意味がある気がした。

戦い合った者同士でも、そこに祖国や家族への愛情がある時、人間は分かりやすい、尊敬し合う関係になれる。憎しみや悲しみよりも、人々は、希望や喜びを求めめる。

二〇二〇年のCOVID19で延期となった様々な事業のうち、最も日本として影響を受けたのが、「東京オリンピック・パラリンピック2020」であった。結局、一年延期で二回目の東京大会は、コロナ禍の数々の困難を乗り越えながら無事開催を果たした。世界からは「アリガトウ」の声が多々届いた。

筆者は、二〇一八年六月二十三日に、『オリンピックと日本人の心』（内外出版）を上梓した。その中の一章は、「靖國神社とオリンピック」と題し、西竹一選手など日本人のメダリスト等が靖國神社に祀られている事を述べた。また、靖國神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑の違いを説明した。靖國神社は、明治二年（一八六

九年）に明治天皇が戊辰戦争等で国家のために命を落とした人々を地位に関係なく祀るために創建された。一方、千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、昭和三十四年（一九五九年）、昭和天皇の時代、海外からの遺骨で引き取先が見つからないものの納骨堂として建てられた。両者は別の意味で夫々存在価値がある。しかし、マスコミやそれに踊らされる政治家も、なぜか千鳥ヶ淵に参拝することは良いが、靖國神社に参拝することは問題だというような風潮になっている。これは、国民の気持ちや行動から見ても、かけ離れたものである。また、八月十五日に靖國神社を参拝するようになって、その日が、日本全国老若男女にとつて、いかに大事かを認識させられた。暑い中、車椅子や杖で来訪される方、赤ん坊を抱っこして来る方、鳥居の外まで整列しながら参拝の順番を待つ人々、皆、平和を願って祈りに来ている。

「国民に寄り添う」とはどういうことか。八月十五日、武道館の式典に遺族は招待されるが、生き残った元軍人さん達には呼ばれない。年老いた彼らは、靖國神社に参拝しながら、炎天下で、陛下や総理がご臨席の式典の終るのをじっと待っているのである。「遠くからでもこの日

だけは友人に会いに来る。」、「戦場で亡くなっていった同胞のことが忘れられない。」、「食べる物もなく餓死した仲間、白米を食べさせたかったと毎日思う。」、そんな声が聞こえて来る。

本稿が掲載される令和四年（二〇二二年）は、日本国にとって重要な節目の年である。昭和二十七年（一九五二年）四月二十八日に、サンフランシスコ講和条約が発効し、日本が敗戦後の占領下から独立して主権回復をしてから、七十周年を迎える。また、昭和四十七年（一九七二年）五月十五日に沖繩が日本に返還されて丁度五十周年になる。

昭和二十七年十月十六日、日本の主権回復後初めて、天皇皇后両陛下は靖國神社を行幸啓され、御親拝された。遺族を含む約一四〇〇名が万歳三唱し奉送迎している。戦後七年間待ち望んだ遺族にとつて両陛下の御親拝は言葉に表せない程の感動だったと言う（「靖國」昭和二十七年十一月十五日号）。

七十年を経て、二十一世紀、激動の国際情勢の中で、日本は「主権回復」の重みと深さを再認識し、原点にかえて新たな一歩を進める時である。

ありがとうございます。（合掌）

## 多田野語録

「人生、一誠に帰す」

会員 多田野 弘

今回のテーマは、自分の一生がどうであったかを考えさせられる。何年前か、日野原重明著「年とりや、いいってもんじゃない」を読んだ。いくら長寿を誇つても、他に役立っていないなら、何のためか生きてのかを考えてみよと言っている。世のため命を懸けて働き、早逝した明治維新の人たちの記憶は、永久に消えることがない。生き延び長生きしか考えない存在には、誰もなりたくないだろう。私自身が100年余の人生をどう生きてかを振り返ってみる。一生を通して、私を行動に駆り立て、奮起させたのは主に、私の積極的な気質だと思っていた。徴兵1年前に、海軍に志願したことに現れている。その頃の常識では、なぜ好き好んで軍隊に行くのかと、嘲笑する人が多かった。入隊後まもなく戦争が勃発し、最前線に出してくれと逸早く申し出たのも隊内で私一人だった。

だが、人生を左右する大事なことを、単に気質のみで決めたのではなかった。もっと大きな何かによって、牛耳られているのではないかと感じていた。死を避けられない戦況下、ラバウル基地でのある夜、心の奥から聞こえてきた「びくびくせず、心に潔く死ぬ」を、魂の声だと直感したのである。その後もサイパンへ移動中に船が魚雷を受け沈没漂流、ペリリュー島・フイリピンでの戦闘など、幾度も死に直面したが、奇跡的に生き残った。それらを通じて私は、神の意志を帯びた何かが生かしてくれたのだと信じるようになった。しかしなお、魂の存在は独り合点かもしれないと考えていた。

戦後、幸いに三人の先哲の書から、魂について貴重な示唆を与えられた。ロシアの文豪トルストイの著「人生の道」に、「魂は肉体に宿り、心と身体を統御・支配する」とあった。辞書にも同じ文意で記されているのを見て感動した。わが意を得たりと、私の魂についての考えはゆるぎないものになった。

もう一人は、ビクター・E・フランクルであり、その書「夜と霧」である。オーストリアの精神医学者だが、ユダヤ人のため、ドイツのナチに捉えられ、アウシュビツ収容所に送られ、妻はガス室で殺された。彼は、収容所内で不思議な光景を目撃した。逐次呼び出されてガス室に送られるので、囚人は皆、いつ呼ばれるかと戦々恐々としていた。ところが、呼ばれた中のある者は、昂然として国歌を歌いながらガス室へ入っていった。また、指名された若者の身代わりを買って出る不可解な老人もいた。病人の枕元に、自分のパンをそつと置いて、作業に出ていく者もいた。彼はこれらを目前に見て感動し、このような崇高な犠牲的精神は人間のどこから出ているのかを考えた。後にそれを、超越的無意識であり、日本という魂であると発表するや、忽ち世界中で翻訳されてベストセラーになった。

さらに、古代ギリシャの哲学者ソクラテス（前470〜前399）は、日本の縄文時代、竪穴式住居で食べることしか考えなかった頃、既に「魂は不滅、真の自分は魂である。徳を養い善を行え」とアテネ市民に説いて回った。凄いがいいのである。彼の説く「真の自分は魂である」は、私が最初に直感したのと同じだったので、意を強くした。

先哲三人から魂の素晴らしい働きを知った私は、心や理性よりも、魂に従って生きようと心に誓った。したがって、戦後の生活は苦しかったが私には天国だった。生命の危険が全くなく、生かされている喜びしかなかった。ところが、その平穩な環境にも、違和感を覚えるようになっていた。かつて、何度も死ぬ目に遭いな

がら生かされてきたにもかかわらず、何らその恩に報いてないことに負い目を感じていた。同時に、海軍の規則正しい爽快な生活が偲ばれて、じっとしていられなくなり、思いついたのがアラムなしの5時起床だった。

自発的な早起き、起床後のジョギング、ジョグ後に自宅のプールでの水泳、元日の寒中水泳などを、93歳まで49年間続けた。他の人から見ると、余程意志が強いからだと思われるが全く違う。魂が私を衝き動かしていたのであり、やりおえた後の爽快感が続ける原動力にもなっていた。自分を統御・支配できた克己の喜びが大きかった。

大いなるものの存在を感じ、自分を統御して、生かされた命の意味を自分に問いかけながら、何かのために生きぬくことは「人生一誠に帰す」といえるだろう。

### 多田野語録

#### 「百万の典経日下の燈」

会員 多田野 弘

今回のテーマは禅の大家今北洪川の言葉である。百万の聖人賢人の書を読んでも実行しなければ、太陽の下でローソクを灯すようなもの、何の役にも立たないの意である。私たちが書を学ぶのは、人

間が生きていくのに必要な原理原則を、とことん追求していくためである。といっても、原理原則がそのままに役立つとは限らない。学ぶことは、自分自身を納得させるためには大事だが、千変万化する現実に対応していくには、現場での実践を通じた応用力をつけていくことが欠かせない。つまり、学問的研究と実践的活動は、人生になくはならない車の両輪といえる。

カントは「実践なき思索は空虚であり、思索なき実践は盲目である」と述べ、人間が本当に人生に自信を持つて生きていくには、実践的な確信と思索によって得られた論理的確信がどうしても必要だと言っている。私たちが堂々と人生を生きていくには自信が必要であり、誰もが自信を持ちたいと願っている。カントは、納得がいく実践の成果と論理的な根拠が示されたときにのみ身に付くという。つまり、学問的な根拠を支えにした実践があると、いくら人からつつかれてもびくともしない自信を持つことが出来る。私が百年余の人生で、どのようにして自信をつくってきたかを振り返ってみたい。昭和14年、志願して入った海軍の1年間、基礎教育としての理論と実践が鉄拳を交えて叩き込まれた。その一つは、

艦内活動の基本としてのシーマンシップである。「スマートで、目先が利いて几帳面、負けじ魂これぞ船乗り」と、よく聞かされた。スマートとは、最近若者がいう「カッコイイ」という意味ではなく、動作が機敏で、やることに無駄がなく、他に迷惑をかけないことをいう。言い換えば、やることなすことが洗練されてスツキリしていることである。

目先が利いてとは、先見の明があることをいい、視野が広くて先手先手と仕事をやっていくことをいう。几帳面とは、「だらしない」ことの反対で、確実にキチンとしていることである。負けじ魂とは、いうまでもなく、敢闘精神で、やり遂げるまでは絶対に止めないことをいう。これらの体験を通じた1年間で、私是不撓不屈の心身がつくられた。海軍はありがたいところだ。一年間無料、住み込みで鍛えてくれた。

続いて教わったのが、リーダーシップの理論と実践であった。山本五十六元帥の「やって見せて、言っただけ聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」という格言が有名だ。「リーダーシップの要諦は、指導者たるべきものが一生を通じて収斂体得するもので、他からの学問や技術でその奥義を身につけることはで

きない。一度開戦となれば、部下を死地に赴かせることもある。その時、部下が欣然と死地に突入するような関係をつくり出すことである。そのためには指揮官は、予てから部下の信頼と尊敬を受けるよう精神修養に努めなければならぬ」と教えられた。平和な戦後にもリーダーシップは必要だった。

昭和23年8月、焼け跡に24坪の工場、資本金50万円、従業員4名の株式会社を立ち挙げた。幸いにも、戦後に始まった復興景気と2年後の朝鮮事変の仕事が増え、少しずつ規模を大きくしていった。

そして父から、30歳に満たぬ私に経営が任されていた。だが、私には海軍で教わったリーダーシップ以外、経営の知識は皆無だった。しかし、その後には急な発展をしたのは、昭和30年9月、総力を投じて油圧式トラッククレーンを試作してみたことに始まる。まずやってみると、即断と実践であった。

試作機は各地の展示で思わぬ高い評価を受け、瞬く間に注文が殺到してきた。急遽、人員、設備を増やして対応したが思うように生産が進まず、混乱さえ見えてきた。その解決策に、眠れぬ夜が続いたが、神は私を見捨てなかつた。たまたま書店で、ドラッカーの書「現代の経営」

を発見し、貪るように読んだ。一字一句が心に染み渡り、目から鱗の落ちる思いがした。企業目的は社会に貢献することにあり、人間信頼を基本とせよとあった。私は、この崇高な理念で経営するなら、潰れても悔いなしと心に決めた。

ドラッカーの経営理念を戴して、次々と新しい改革案が浮かんできた。私は意を決し、まず全員月給制、タイムレコーダーと出勤簿の廃止を皆(社員、約250名)の前で宣言した。すると忽ちその効果が現れ、不思議にも恒常的に続いた遅刻がピタツと止まり、生産は見る見るうちに軌道に復したのである。人間は信頼すれば、必ず応えてくれるのを知った。

この制度は、松下電器に次ぐ快挙なのを知って自信を深め、続いて週休二日制を四国で真っ先に導入した。

現在、資本金130億円、社員1400名、製品の半分以上を輸出する世界企業にまでなっている。経営に必要な哲学理論に、人間信頼による社員の協力と実践が加わったの結実である。まさに百万の典経日下の燈といえる。もう一つ私事で申し加えたいのは、かつて青年期に戦場の3年間、死を目前にして過ごしたことから、即断・実践の習慣がつけられ、それが私の精神の若さと長寿を齎してく

れたことである。

多田野語録

「渋沢栄一に学ぶ人間学」

会員 多田野 弘

渋沢栄一は、明治の初期に日本を近代国家につくり上げた偉人であり、76歳に刊行した「論語と算盤」に記されている企業理念の礎となる思想を、日本の産業界に導入した。論語と算盤という異質のものを、合一した意味が分かれば、彼の人間学を解明できるのではないだろうか。

彼は、慶応3年(1867)27歳の時、第2回パリ国際博覧会に出席する徳川昭武に随行し渡仏した。滞在中の2年間にわたりヨーロッパ諸国を歴訪して、西欧の新しい技術や産業の仕組みを、詳らかに吸収・会得してきた。彼は、日本の文明が西欧に著しく遅れていることを痛感し、帰国後、日本を逸早く欧米に比肩する国にせねばならぬと考えた。それは当時、国中で叫ばれていた富国強兵の国策にも沿っていた。日本で初めて銀行をつくり、全国各地に配置し、商工業の会社を生涯に総数約500社つくり上げた。同時に、「論語と算盤」の思想をそれらの会社に導入を図った。

彼はヨーロッパ諸国を歴訪したことで、

巨視的に物事を見るようになったと思われる。その一端として、人間も会社も社会的責任のある存在だと述べている。しかも、その責任を果たすには、「論語と「算盤」という東洋と西洋の思想が必要であるとした。論語は、人として守るべき道、東洋の精神性「倫理・道徳」を現しており、算盤は、「入るを量り、出づるを制す」という西欧の経済合理性を示している。この東洋の精神性と西欧の合理性を併せ持つことによって、人も企業も社会的責任を果たすことができる考えた。

社会的責任を果たすとは、「どれだけに世に役立つているか」という社会的存在価値あらしめることである。またその存在価値によって、人は社会から相応に処遇され、企業はその存続と発展を望まれるという仕組みになっている。経営学の泰斗ドラッカーも渋沢から多大の影響を受けたと言われており、「人も企業も目的は社会貢献にある」と述べている。経営の神様と言われた松下幸之助は、利益の生まれない企業は世の中の寄生虫で、潰れて当然だ、社会に貢献していない証拠だといった。ドラッカーも松下も渋沢と同様に、人も企業も社会的責任ある存

在であることを基礎にしている。

彼は、「論語と算盤」という思想を産業界に実現させるのみでなく、公共事業・教育・医療・福祉など公益を追求した。そのなかに、渋沢の類稀なる高潔な人間観があふれ、人生・社会を豊かにする考え方や生き方の原理を見ることができ

### 多田野語録

「戦争はなぜ起きるのか」

会員 多田野 弘

先日、この質問にすぐ応えられなくて、後日を約したので弁明する。戦争という大問題は、誰もが考えも及ばぬことのように思える。だが、人間同士の争いは、大は国家間の争いから、小は隣近所や夫婦間の争いまで含まれるとらえれば、争いに共通した問題として、私たちが真剣に考える必要がある。なぜ争いは起きるのか。

これらの争いの源は、人々が人間の本質は理性であり、理性は完全であると考え「人間の心の在り方」からきている。その結果、自分が正しいと思うことをどこまでも主張するようになって対立を深め、争いになっていく。つまり、理性が争いの種をつくっているといえる。過去

のいずれの戦争の発端も、正義の争いから起こっており、しかも、両者の正義を力に訴えて解決しようとしたことにあるた。

また近代は、自由と平等という理念が浸透した結果、「権利と義務」という社会通念が常識になっていく。これは合理的な概念であるが、権利は対立を生み、義務は強制を強いるようになる。大事なのは、いかに正しい理念であろうと、主張のし過ぎが争いの火種になっていることを知らねばならない。

それでは、平和を実現していくために、何が一番大事なのだろうか。1946年パリに設立された、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の憲章前文に、「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから人間の心の中に平和の砦を築かねばならない。」と宣言されている。

自分の心の中に平和の砦を築くにはどうすればよいか。その一番目は、理性の限界を知ることである。自分がどんなに正しいと思っても、それは決して完全ではない。自分と違った考えに出会ったならば、否定や排除ではなく、何かを学びとることで、さらに良い考えが創られ、自分も成長していける。そういう理性の



帰(一式陸攻)。

・昭和19年1月11日

ラバウルにて搭乗員、機材ともに消耗のためサイパン島に移動(海河丸、羽黒丸)。

・同1月12日

航海中、コンソリー爆撃機が来襲爆撃され、羽黒丸が沈没、わが船には至近弾のみ。

・同1月13日

航海中、敵潜の魚雷を受けわが海河丸が沈没、漂流後、駆逐艦に救助されサイパン着。35名戦死。

・同2月19日

トラック島基地全滅のため竹島基地へ、戦闘機とともに一式陸攻にて。

・同3月

サイパンより基地撤収、ペリリュー島へ本隊へ移動(空母千代田)。

・同3月30日

ペリリュー島に敵機動部隊来襲、激戦するも戦闘機隊全滅、戦死傷246名、ゼロ戦32機失う。

・同3月31日

グアム、サイパン基地より友軍戦闘機52機応援に来るも全機未帰還。

・同4月1日

敵上陸に備え陸戦隊編成されるが兵器なく、玉砕決意する。

・同4月7日

ゼロ戦受領のため内地出張、パラオより(二式大艇)にて横浜に着水。

・同5月

ゼロ戦32機受領、台湾経由、フィリピン・セブ島に(一式陸攻)。

内地出張中、本隊はペリリュー島を撤収し、ジョクジャ丸にてセブ基地へ向かうも、雷撃を受け沈没、生存者のみセブ基地到着。

・同9月11日

セブ基地は敵機動部隊の奇襲を受け、ゼロ戦70数機を失う。

・同9月

セブ島からルソン島マバラカット基地へ移動(一式陸攻)。

・同10月20日

マバラカット基地より、わが国最初の神風特攻隊を発進させる。

・同11月

任上等整備兵曹

・昭和20年1月

ゼロ戦全機特攻に編成、201空隊員は比島基地陸戦隊に編入される。

・同1月

ゼロ戦受領のため残存搭乗員と内地出張(ダグラスDC3輸送機)

・同1月

戦闘306部隊に転属、神之池基地の神雷部隊戦闘機隊へ。

・同1月

九州都城基地、続いて富高基地へ進出。

・同2月

宮崎基地進出、敵機来襲負傷、別府海軍病院入院。

・同4月

全治退院、富高基地へ復帰。

・同8月

終戦、解隊、復員。

・同11月

勲八等瑞宝章賜る。

一式陸攻	双発爆撃機
ダグラスDC3	双発輸送機
空母	航空母艦
二式大艇	四発飛行艇

「郷土の身近なる特攻史」

理事 福江 広明

1 郷土の特攻史を知るきっかけ

一昨年、『特別攻撃隊全史』（以下、全史）の第2版が12年ぶりに刊行された。当会に入会して4年目ながら、その記載内容を一部改訂する事務にかかわった。全史を精読したのは、正直このときが初めてだった。

印刷会社の校正刷りを原稿と照合する作業は、時間と根気を要した。しかし、おかげで私の郷里が特攻史に関わりを持つことに、気づくことができた。該当箇所は、全史の332頁。鹿屋特攻基地の



長崎県大村市の地理的位置

碑「特攻隊戦没者慰霊塔」に関する説明の一部、「…出撃した神剣隊（大村空）…」の記述文まで読み進んだところで、思わず手を止めた。

私の出身地である長崎県大村市が前大戦中、戦火に見舞われたことは幼い頃から知っていたが、特攻に纏わる話を耳にしたことは一度もなかった。当時、市内に配置されていた大村海軍航空隊において、航空特攻の部隊が編成され出撃した史実があったとは驚きだった。

全史を改訂する作業を再開した時には、郷土の特攻史を調べてみようと思いついていた。

先述の作業から数日後だったと思う。母校（県立大村高等学校）の一年後輩にあたる山下健一郎氏（現・大村市の副市長）が公務のため上京した折に、私の勤務先を訪ねてくれた。久しぶりの再会だった。その際に当会の名刺を渡したことが、郷土の特攻史に関する調査を進めるきっかけとなる。

後日、大村市立図書館職員の方から、航空特攻の部隊である「神剣隊」に関する情報が私の元に寄せられた。山下副市長が特攻にかかる郷土史の有無について、問い合わせしてくれたのである。

2 郷土の歴史資料館の協力を得て調査開始

郷土の図書館からの情報提供は、当会の理事として思案中であった課題の解決策にもなった。私は調査研究グループの長に就いたばかりで、その業務の方向性を定めなければならぬ立場にあった。当該グループ員は私を入れて7名。専従できる会員は一人もおらず、当会が独力で特攻にかかる新たな史実の発見や保管データの検証を行うことは、かなり難しい状況にあった。

その最中に、先述の「でき事」に出会ったわけである。全国各地に所在する歴史資料館、図書館等との共同作業ならば、より迅速にして精度の高い調査研究を行えるとの期待が一気に高まった。潜在的な史実が明らかになる可能性すら予期できた。

こうした思いを持って、大村市歴史資料館・学芸員の川内彩歌氏に協力の依頼をしたところ、「自治体としても大村の歴史研究に繋がることから、情報提供を惜しまない」との返答であった。これにより、郷土の歴史資料館とコラボしながら特攻の調査研究を行い、その一連の活動と成果を当会の会報に掲載しようと考えているに至った。

今回の調査に関する詳細な経緯や結果は後述するとして、主な成果（私が初めて知り得たことを含む）については、次

の5つになる。

① 6次にわたる航空特攻の「神剣隊」搭乗員は、大村航空隊において訓練し編成され、鹿児島鹿屋航空隊に移動後、鹿屋基地から出撃したこと。

② 「第3神剣隊」の搭乗員であった甲飛4期の林田貞一郎氏については、訓練期間中に懇意にしていた大村市民がいたこと。

③ その市民の親族が、戦後に同氏の生前の写真を知覧特攻平和会館に出向いて寄贈していたこと。

④ 前項の写真について調査する中で、鹿屋航空基地史料館にも問い合わせたところ、保管資料から林田氏の辞世の句を知ることができたこと。

⑤ 「神剣隊」とは別に、特攻戦没者の中に大村市出身の方が2名おられたこと。おひとりには航空特攻部隊「七生隊」の出撃で散華。もうひとりの方は、呉工廠において戦死されていること。

いずれも新たな史実の発見とまでは言えないかもしれない。しかし、戦後70年以上が経過し、郷里において特攻隊員と一般市民がふれあつた事実が消失しかける中、関係者の記憶を留め置くことには大きな意義がある。これまで多くの人に知られなかつた特攻隊員個々の短い人生を明らかにすることは、慰霊にあたつて

の重要な行為である。

### 3 大村が軍都と呼ばれた所以

#### (1) 地名の由来

大村の地は、日本初のキリシタン大名である大村純忠（大村家第18代）や天正遣欧少年使節等で歴史的に知られている。江戸時代の270余年の間、12代にわたる大村氏がこの地を統治していた。ちなみに、藩主の居城であった玖島城

の跡地は、現代では大村公園と呼ばれる都市公園となっている。日本の歴史公園百選のほか、桜の名所百選にも選定されている。

地名の由来については、古文書『大村家記二』に「大村トハ当郡中ニ於テ土地肥良大ナル村ナリ所以ニ大キ成ル村ト呼始シヨリ遂ニ村号トス」（大村とは、田畑が広大な地域という意味であり、彼杵郡内で一番広大な農耕地であつたため、大きな村と呼び始めた）と記されている。

#### (2) 軍都としての発展の歴史

大村で市制が施行されたのは、昭和17年2月11日。1町5村の合併によつてい

る。つまり大村市の誕生は、前大戦の開戦直後になる。

大村市のホームページ中にある『新編大村市史』（以下、市史）には、当時の大村が昭和初期から戦時体制へ移行する



現代の桜開花時期の大村公園

日本各地の社会動向をうかがいながら、自らの都市計画を立案し、実行していった経緯が詳しく記されている。

その一つに、第21海軍航空廠が昭和16年10月に設置されたことを取り上げている。これにより、昭和17年末における大村市の人口は同廠の拡張もあつて約5万6千人に、翌年には約6万8千人に激増している。明治以降、大村に順次設置された後述する陸海軍部隊に加え、この海軍航空廠の新設・拡充に伴つた市政運営及び都市計画が進められた結果、大村市

は軍都を形成していった。

なお、市史には「軍都」について、次のような付記がある。「軍都という言葉自体に明確な定義はなく、各個人の所見に従って呼称される場合が大半である。これらのことは大村と同様に陸軍ないし海軍が常駐していた全国の自治体や地域においても同様で「軍都」や「軍郷」といった言葉を研究者・執筆者それぞれが独自に使用しているケースや使用しないケースを見ることが出来る」。

(3) 前大戦中の大村に所在した旧陸海軍部隊

大村海軍航空隊は、大正11年12月に開隊している。当初、西日本における操縦者の基礎訓練から実用機慣熟訓練までの一貫した教育を目的とした地名冠称の海軍航空隊であった。

前大戦の後半になると、戦闘機隊の教官を中心に防空任務を担当するようになり、末期においては航空特攻を遂行する部隊となる。

大村には、大村海軍航空隊のほかにもいくつかの航空隊が作戦推移に応じて編成、配備されていた。それらの戦闘機部隊による「戦闘詳報」、民間団体による「管内主要都市空襲被害状況」、警防団長による日記等の貴重な史料も市史に記載されている。



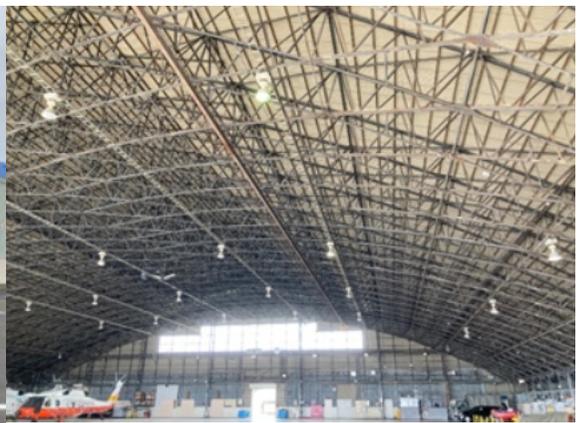
当時の第21海軍航空廠

特に、昭和19年8月開隊した352海軍航空隊（草薙部隊）及び海軍最後の精強部隊と言われた343海軍航空隊が大村海軍航空隊と協同して北九州方面の防空等に当たっていた詳細な記録が目を見

く。352海軍航空隊は、昭和20年8月9日長崎に原爆が投下された際、その上空まで進出して最初に航空偵察した航空部隊でもある。なお、三桁冠称の海軍航空



写真中央が航空廠時代の格納庫（左に隣接する2棟は戦後に建設）



海上自衛隊第22航空群が飛行格納庫として現在も使用

隊のうち、300番台は戦闘航空隊を示している。

一方、陸軍部隊については、陸軍歩兵第46連隊が明治30年から昭和20年終戦までの間、大村の地に駐屯していた。この連隊を母隊として編成された多くの連隊が、大村を拠点として各地で活躍した記録が残されている。

詳細については、郷土出身の村井敏郎氏によって編纂された『郷土部隊50年の足跡 大村陸軍』（昭和58年8月発行）をご覧ください。

この著書は、防衛庁戦史室（当時）の戦史叢書や戦闘体験者からの証言に基づいている。大村で編成された多くの陸軍部隊が、どのように行動し活躍したかを戦跡を追いながら、わかりやすくまとめられている。



昭和19年当時の大村市街地周辺の航空写真、写真の上部左側が大村海軍航空隊の飛行場、下部左側が第21海軍航空廠

#### 4 大村の地に関わる特別攻撃隊

##### (1) 航空特攻「神剣隊」の存在

昭和20年米軍が沖縄に上陸した以降、日本の陸海軍は特攻化へ向けた動きを先鋭化させていく。連合艦隊司令部は、残存艦艇（戦艦大和を含む）及び残存航空機の総特攻を企図する菊水作戦を展開することとなる。

こうした全般の戦況下にあつて、大村海軍航空隊においても操縦の練成訓練を終えた特攻隊員が、部隊名「神剣隊」として編成される。

「神剣隊」は菊水作戦の遂行中に6個隊が編成され、その後鹿屋基地に移動、沖縄方面に向けて出撃している。しかし、大村海軍航空隊は戦局により菊水作戦半ばにおいて解隊（昭和19年5月5日）されている。このため、「第6神剣隊」は、721海軍航空隊に編入された後、鹿児島県の鹿屋基地から出撃している。

「神剣隊」については、大村市歴史資料館から、次の一文と出撃関連資料（①）⑥の部隊毎に、出撃数等、参加作戦、出撃日の順で記載）を提供して頂いた。

「全国各地から集まった特攻志願者は大村海軍航空隊において訓練。その終了後に、特攻部隊となる「神剣隊」として編成され、鹿屋航空隊に移動した後、沖縄

周辺へ出撃した。昭和20年4月6日から5月11日の間に、「神剣隊」の6個隊が編成され、計48人が散華」。

①第1神剣隊（大村航空隊）…出撃機数16機 対して未帰還16名 菊水1号作戦 昭和20年4月6日

②第2神剣隊（大村航空隊）…出撃機数9機 対して未帰還9名 菊水2号作戦



「神剣隊」搭乗員等の集合写真

昭和20年4月14日

③第3神劍隊（大村航空隊）…出撃機数不明（\*）の中、未帰還3名 菊水3

号作戦 昭和20年4月16日 \*：同日、出撃した特攻部隊は3個隊（第2昭和

隊、第3七生隊、第3神劍隊）、その総機数が20機で神劍隊のみの機数（不明）

④第4神劍隊（大村航空隊）…出撃機数4機に対して未帰還1名 菊水3号作

戦 昭和20年4月16日

⑤第5神劍隊（大村航空隊）…出撃機数20機に対して未帰還15名 菊水5号作

戦 昭和20年5月4日

⑥第6神劍隊（戦闘306飛行隊）…出撃機数4機に対して未帰還4名 菊水6号作戦 昭和20年5月11日

なお、上記のカッコ内に記された「大村航空隊」は「大村海軍航空隊」を示している。「第6神劍隊」の所属が戦闘306飛行隊となった背景については、

(3)項の「桜花」等による航空特攻との関係において記述する。

(2)「掩護戦闘機」と「神劍隊」の関係

市史を読み進めていくと、大村に配備された戦闘機による特攻機の掩護及び制空戦闘の状況についての記述があった。

これ自体は、防衛省防衛研究所に所蔵されている『笠野原基地戦闘詳報』に基づ

く内容である。また、国立公文書館・アジア歴史資料センターのデータ・ベース検索でも閲覧できる。

笠野原基地は、鹿児島県鹿屋市に配備されていた笠野原海軍航空基地である。

当該戦闘詳報によると、菊水1号作戦が実施される中、先述した352航空隊、大村海軍航空隊、元山航空隊所属の零戦

等が笠野原基地まで進出した上で、徳之島、奄美大島、種子島、沖縄北端に至る

空域での制空任務に従事している。

これら掩護戦闘機も甚大な被害を受けている様が記されている。「第1神劍隊」

が出撃した4月6日付の記録は、次のとおりである。「第4波として笠野原基地

を1420に発進した零戦23機のうち、1915までに帰着したのは11機、未帰

還は指揮官機を含む7機。他の5機については、エンジン不調、交戦等により徳

之島、喜界島、種子島に不時着」と記録されている。

航空特攻以外においても、大村に関連する航空隊に所属する多数の戦闘機操縦

者が作戦遂行のために還らぬ人となったことが偲ばれてならない。

(3)第721海軍航空隊と「神劍隊」との関係

昭和19年10月1日。原隊は、茨城県の百里航空基地（現在の航空自衛隊百里基地）である。700番台の冠称番号は、

陸攻航空隊を示している。

当該航空隊は、攻撃708飛行隊、攻撃711飛行隊、戦闘306飛行隊、戦闘307飛行隊から編成されていたこと

から、「第6神劍隊」は隷下の戦闘306飛行隊に編成替えとなったものと思われる。

721海軍航空隊は、1式陸攻に「桜花」を搭載して米軍艦艇に体当たり特攻

を支援する航空隊で、「神雷部隊」と称されていた。

その第1陣となった第1神風桜花特別攻撃隊神雷部隊については、20年3月21

日陸攻18機及び零戦19機等が出撃、全機未帰還となった。160名が散華されて

いる。その後6月22日の第10次まで神雷部隊による特攻は継続され、1式陸攻だ

けでも計79機が出撃し55機が未帰還となっている。

細部は、加藤浩「神雷・竜巻部隊概史」「人間爆弾と呼ばれて 証言・桜花特攻」（文藝春秋、2005年3月25日）をこ

覧いただきたい。

5 地元住民と特攻隊員のふれあい 調査活動の中で、「神劍隊」に係する文献、証言記録等を収集していたとこ

ろ、意外にも親族から「第3神剣隊」の隊員に関する情報が得られた。

以下は、同隊の搭乗員が鹿屋基地に進出するまでの期間、妻の祖母が食事をふるまう等、もてなしていた様子を、妻が義母から聞き取った内容を基に記述したものである。

#### (1) 昭和20年春

特攻隊員とのふれあいを祖母が持つようになった時期、経緯や依頼主についてはわからない。昭和20年桜の開花前からの出会いがあったようである。

その時期、週末になると4〜5人の特攻隊員が祖母の家に食事に来ていたことを当時7歳であった義母が覚えていた。祖母の家は大村市内の竹松という地域にあり、大村海軍航空隊に近い場所にあった。

その中の一人が、林田 貞一郎(熊本・天草出身 甲飛4期)「神剣隊」搭乗員等の集合写真のうち、前から三列目の右から2人目)氏である。彼は、菊水3号作戦において「第3神剣隊」搭乗者として鹿屋基地から那覇湾の敵艦船攻撃に出撃し、昭和20年4月16日に戦死している。当該隊員については、全史の195頁に記載がある。

同氏は、祖母を母のように慕い、義母を妹のように可愛がっていたと聞く。出

撃日が近くなつた桜の時期に、義母は隊員達から「散る桜 残る桜も 散る桜」の句を、何度も教えられ暗唱するまでに

なつたとのこと。その様子を見て林田氏が微笑む中、祖母は涙していたそうだ。

鹿屋基地への進出直前に林田氏等が祖母の自宅を訪問した際のエピソードがある。分隊士の林田氏が、航空事故で負つた火傷のため大きく開けられない口で、同行隊員の分までタバコに火をつけて渡し、自らもそのたばこを吸っていた姿が忘れられないと義母は言う。

鹿屋基地へ進出する当日には、林田氏が搭乗した戦闘機が祖母の家の直上を数度旋回したことも義母は覚えていた。その時には、林田氏の実父が彼の郷里である熊本から来られており、祖母や義母と一緒に家の洗濯干し場で大きく手を振って見送られたそうである。

こうした家庭的な交流を持つ間、祖母は林田氏をはじめ特攻隊員の写真を撮り、その裏に日時や名前と共にメモを残していた。この行為から、祖母は彼らの任務は必死であることを理解していたことがうかがえる。

林田氏にかぎらず特攻隊員の戦死の知らせが、どこから届くたびに、祖母は彼らの遺品をまとめて実家等に送っていたとのこと。戦死通知は軍にとって伏せ

ておきたい情報であるはずだが、なぜ祖母に伝えられたのかは不明なままである。

#### (2) 平成15年1月

祖母が昭和45年に他界するまで林田氏の弔いとして続けていた事があつたと祖母の孫にあたる私の妻が語ってくれた。祖母は、林田氏の月命日に必ず仏壇に手造りの「おはぎ」を供えていたとのことだ。それは、林田氏から「もし自分が戦死したら、大好きなおはぎを命日に供えてほしい」と頼まれていたからだと祖母がある日、妻に話してくれたそうである。

平成15年になって、義母の長男が母親を連れて鹿児島を旅行することを申し出た際、義母は旅行に合わせて特攻隊関連の歴史資料館を訪問することを希望したそうだ。それは、林田氏を中心に撮つた写真(祖母による裏書きあり)が唯一手元に残っていたため、供養になればとの思いがあつたからである。

義母と長男は、同年1月16日に知覧特攻平和会館を訪れている。なぜ林田氏が出撃した鹿屋基地に隣接する鹿屋航空基地史料館が訪問先にならなかつたのか。

このことを確認したところ、林田氏の出撃基地が鹿児島方面だったという記憶と、それならば知覧にある特攻平和会館ではないかとの思い込みがあつたとのこと。結果として、当該写真を同会館に寄贈し

帰省している。

(3) 令和3年12月

今回の一連の調査では、義母が知覧特攻平和会館に寄贈した写真の存在を確かめることが重要なポイントの一つとなった。これまで関係者による生前の特攻隊員に関する単なる記憶であったものが、物証を得ることで確かな証言になるからだ。私と妻は事前に入館の予約を取った上で、令和3年12月7日知覧特攻平和会館を訪問。同館学芸員・八巻聡氏に対応していただき、義母が寄贈した写真の写し(寄贈写真そのものは所在がわからず)をコピーしたものを受け取ることができた。

まず、写真の中央(大人列の右から三番目)が、林田貞一郎氏。一番左が妻の祖母で、子供は義母である。なお、大人列の一番右は「眞砂上飛曹」、右から二番目は「小田部久左衛門」、祖母の右側の女性は「郁子さん」と裏書きされている以外、詳細は不明である。

林田貞一郎氏を中心に撮った写真の裏側肝心の裏書きについては、写真を貼っていた糊痕のために一部判読できないが、以下の事が記述されている。これは祖母の直筆である。判読困難な部分は\*印を付けた。



林田貞一郎氏を中心に撮った写真

『昭和20年4月8日写

林田貞一郎分隊長、特攻隊として沖縄に出陣 12日出発。4月16日見事敵艦に命中、24才の若櫻花と散りけり。林田の兄ちゃん 忘れがたき修養せし人 ニックネーム 坊やノ人\*

眞砂上ヒ曹(\*\*\*), 小田部久左衛門(\*\*)、\*一家の\*人だった。\* \*\*郁子さん、綾子\*\*ので、林田の兄ちゃんの意志を忘れず\*\*張りませう』

昭和二十年四月八日寫  
林田貞一郎分隊長 特攻隊として  
沖縄に出陣 12日出発 4月16日見事  
敵艦に命中 24才の若櫻花と散りけり  
林田の兄ちゃん 忘れがたき修養せし人  
ニックネーム 坊やノ人  
眞砂上ヒ曹(\*\*\*)  
小田部久左衛門(\*\*) \*  
一家の\*人  
林田の兄ちゃん  
綾子\*\*  
林田の兄ちゃんの意志を忘れず\*\*張りませう

林田氏が鹿屋基地から出撃する4日前の写真からは、様々な事を想像してしまふ。林田氏だけが搭乗前の飛行服をなぜ着用していたのか、微笑んでいるようにも見えるのはどうしてか、そしてどのような心境だったのか。甲飛4期で分隊長となれば熟練の操縦者であっただろうになぜ志願したのだろうか、それは顔の火傷と何か関係があるのか。大村海軍航空隊では分隊長兼ねて教官が多かったとの記録もあることから、教え子に対するならんかの思いがあったのではないだろうか。

ちなみに、知覧特攻平和会館内において紹介されている電子版の隊員情報には、この写真から本人の顔だけを拡大したものが掲載されている。

翌日12月8日早朝に鹿児島市内を出発

し、鹿屋航空基地史料館に向かった。同資料館では、研修教育等担当の山森正彦氏に出迎えていただき、林田氏にかかわる一連の資料を拝見させてもらった。ここでは、平成7年9月に遺族の方が寄贈された林田氏の遺影と熊本にある林田氏の墓石に刻まれている辞世の句（左記のとおり）をそれぞれ写ししていただくことができた。

『敷島の和男児が腕を撫し 嗚呼待ちたるぞ今日の出陣 いざさらば桜と共に吾は征く 御国を護る靖国の宮』

この時の鹿児島における調査活動は、私はもとより妻にとっても感慨深いものであったようだ。妻にしてみると、戦時中における祖母の生き様の一端を知ることができたとともに、特攻隊隊員の生前の姿をうかがい知ることのできる特攻に関する理解を深めることができたのではないだろうか。

## 6 大村出身の特攻隊員に関する調査とその結果等

先述の「神剣隊」戦没者については、全史における出身県を調べた限りでは長崎県の記載はない。このことを知った時に、大村市の出身で特攻隊戦没者の方がおられたのかについて、併せて調べることを思いつく。大村市歴史資料館に問い合わせたところ、これまで大村出身の

特攻隊員をテーマにした文献はないとのことであった。その際、同資料館からは長崎県下及び大村市の戦没者名簿から記録をたどることは可能ではないかとの提案をいただいた。

そこで、同資料館から紹介してもらった2冊の図書（戦没者名の記載あり）と、全史第2編・特別攻撃隊戦没者名簿を照合することにした。

紹介図書の一つは、『風雪の塔』という長崎県連合遺族会発行の図書で、同会の創立25周年を記念した製作された特集（昭和47年7月）号である。もう一つは、『ふりむいて』という大村市遺族会が戦後50周年記念誌として発行（平成7年8月11日）したものである。ただし、この図書は、明治10年西南の役以降、大東亜戦争に至るまでの戦没者及び遺族を対象とした名簿になっている。

これら3冊を照合した結果、2名（①少尉・晦日 進 ②兵曹長・深江 正市）の方が該当することがわかった。ご両名にかかる情報を整理した結果は、次のとおりである。

①晦日 進 氏…全史の該当頁は198頁。「海軍航空特別攻撃隊・第57生隊、昭和20年4月29日、沖縄島北端120度60海里にて戦死」との記載あり。紹介図書に記載された戦死場所、戦死年月日、

年齢と一致するほか、海軍大尉への昇進、勲5等双光旭日章の受章と実家の住所等が明記されている。

②深江 正市 氏…全史の該当頁は234頁。「特殊潜航艇・日本本土西部、昭和20年6月22日、呉工廠にて戦死」との記載あり。また紹介図書には戦死場所「内地」及び実家の住所との記載のほか、戦死年月日が昭和20年7月22日とある。

この照合結果から、①晦日氏は、記載事項の全てが一致することから確定して、よいと考える一方、②深江氏については、戦死日がちょうど1か月異なるため、同一人物と認定することは現時点では難しい。ただし、呉工廠造兵部が空襲されたのは、昭和20年6月22日であることは事実である。

## 7. 各地の歴史資料館等と連携して得られる特攻史の成果等

### (1) 調査の総括

私の郷里である大村市歴史資料館から届いた1本のメールを皮切りに、大村市にかかわる特攻史を調べることになった。当該資料館の全面的な協力が得られたことで、設定した調査を順調に進めることができた。ここであらためて明らかにできなかった事項といまだ不明な事項等について総括する。

ア 海軍航空特別攻撃隊にうち、6次に

わたる神剣隊は、大村市内に所在した大村海軍航空隊において訓練、編成された。ただし、第6神剣隊に関しては、大村海軍航空隊が5月5日に解隊されたため、出撃前に721海軍航空隊に編成替えとなった。

なお、大村海軍航空隊跡地に戦後建設された陸上自衛隊竹松駐屯地において、現地取材を行った際に、同駐屯地・勤務隊員の協力によって、6頁に掲載した「神剣隊」の集合写真が撮影された場所をほぼ特定することができた。

イ 神剣隊の搭乗員達が鹿屋基地に移動するまで滞在していた大村の地において、週末に航空基地周辺の住民と交流があったことが地元関係者からの聞き取りにより、その一部を明らかにすることができた。

特に、戦後も地元住民が保管していた第3神剣隊の分隊士として出撃した甲飛4期の林田貞一郎氏等の写真は貴重な記録であった。その写真自体は私の親族により平成15年1月に知覧特攻平和会館に直接届けられ、現在も同資料館に保管されている。遺影として掲示されていることもわかった。

ウ 前項の関連で、当初海軍の航空特攻であれば、義母等は鹿屋航空基地史料館に写真を寄贈したと判断したため、



右側の写真の一角：「神剣隊」の集合写真と思われる駐屯地の前方で撮影された竹松群の自衛隊の陸上自衛隊の写真

同館に調査を依頼。しかし、この判断は誤りであったが、平成7年に林田氏の実弟と従弟が同館に遺影を寄贈されたことを知ることができた。その際、林田氏の墓石に刻まれた辞世の句を確認できた。

エ 全史に記載されている特攻戦没者名簿と大村遺族会名簿を突合することで、特攻戦没者の中に大村市出身者2名がおられることを確かめることができた。晦日進氏は、海軍航空特別攻撃隊・第5七生隊の出撃（昭和20年4月29日）で散華されたことがわかった。

深江正市氏については、特殊潜航艇

関連で呉工廠において戦死されている。しかし、戦死日に関して、全史では昭和20年6月22日とある一方、遺族会図書には同年7月22日と記され異なっている。

なお、戦死日の異なる点については明らかにできなかった。

(2) 各地の歴史資料館等との連携による特攻史の調査研究に寄せる期待

近年、当会の調査研究グループ（現任員7名）は、ほぼ単独で調査命題を設定した上で成果を求める地道な作業を行ってきた。この作業要領はかなりの時間と労力を要し担当会員個人の負担が大きい。その上に、今後は特攻隊戦没者遺族からの直接的な協力が得難く、潜在すると思われる貴重な特攻隊関連資料を入手する可能性はますます低くなる。

こうした中、今回は期せずして、地方の歴史資料館・学芸員等の積極的な協力支援が得られたことで調査を進める機会に恵まれた。これまで知られていなかった点及び不明確であった点を、明らかにすることができた。しかも従来の要領に比してかなり効率的であった。

今回のような地方の歴史資料館等と当会によるコラボレーションが特攻史の調査研究にもたらす効果としては、次の点が挙げられる。

ア 各地の歴史資料館等には、特攻をはじめ戦時中の記録資料が秘蔵の状態で、かなり保管されている可能性が高いこと。イ 歴史資料館等で勤務する学芸員等の知見は高く、特攻に関しても有力な情報の提供を期待できること。

ウ 特攻史に関連する資料・データの収集並びに調査要領の検討等に費やす時間を短縮することができること。

当会の調査研究グループの長を務める者としては、まずは今回行った情報収集及び調査のやり方を一つのモデルとして確立させたい。その後は、当会独力の調査研究に加えて、地方の自治体及び歴史資料館等との連携を重視した方法により、これからも散逸し続ける特攻史にかかる貴重な記録を発掘していくことで実績を上げていくことを望んでいる。

(3) 栄都へ発展した大村市の現在の姿  
私が郷里で過ごした小中高生時代の昭和40年から50年初め、大村市は人口5万人で推移したが、今や10万人に達するほどの都市と呼ぶにふさわしい発展ぶりである。全国的に少子化が進む中であつて、2025年には人口10万人を目指している。

現在、園田裕史市長のもと第5次大村市総合計画が推進中である。「しあわせ実感都市大村」をスローガンに、「行き

たい、働きたい、住み続けたい」を将来ビジョンのテーマに掲げ、市民と共に幸せを実感できる街づくりを取り組んでいる。

今年、大村市にとって市制施行80年の大きな節目の年にあたり、様々な事業が市の発展・繁栄に向けて取り進められている。中でも今秋には西九州新幹線の開業が予定されアクセス環境が良くなることで、経済効果が高まるとの期待がある。

その発展を象徴する一つに、冒頭で触れた令和元年10月に新設された「ミライオン」がある。同施設は、長崎県立・大村市立一体型図書館と、大村市歴史資料館との複合施設である。この施設では、運営にあたって「郷土(ふるさと)の歴史と文化に親しみ」を掲げていることから、ぜひ前大戦時の苦難の歴史もテーマに取り上げていただきたい。

今回の調査結果が当会の会報に掲載されたならば、協力先である大村市歴史資料館に寄贈するとともに「ミライオン」において多くの市民の目に留まることを期待したい。

結びにあたり、大村の地を離れて半世紀近く経つ今日、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を目的とした一連の調査活動を通じ、再び郷里に想いをはせることができたこ

とに心から感謝したい。

特攻にかかる調査研究は、これからいっそう困難な活動となるであろう。それでも地方自治体及び各地の歴史資料館等の協力が得られれば、私自身の当該活動への取組み意欲は高まり、新たな成果を求める自信と行動力になる。次なる「身近なる特攻史」の対象となる市町村等が、この記事がもとで早期に定まることを切望する。



長崎県立・大村市立一体型図書館及び歴史資料館の外観

出陣の盃  
陸軍航空特攻の「別盃」について

会員 大槻 健二

一、はじめに

祭祀や儀礼に関する日本の文化と酒は切っても切れぬ仲である事は御存知の方も多いと思う。現代にあつては結婚式に辛うじて形を留めているが、戦前・戦中にあつては各家庭にも盃の儀礼が根付いていたと聞く。本稿は、航空特別攻撃隊において行われたいわゆる「別盃」「別れの杯」と呼ばれる行為について記述をまとめたものである。

特攻に関する情報は誰が言ったとも分からない様な噂話がひとり歩きしている感があり、一部の方にはそれが全て文字通りの「水盃」であつて酒なぞ一切あり得ないという主張が通説の様にまかり通つている状況にある。また、写真の解説に「別れの水盃を交わす特攻隊員」といつた解説を付けているが、どこにもそのような回想などは残されておらず困惑する場面もある。酒は酒で、「特攻隊の別れの盃に飲まれた酒を造っていた」と紹介されていた酒造会社が実は単に軍に納品していた事実を客が拡大解釈して紹介した話が二件もあつた。話は逸れたが本稿

をまとめ終えた今、「水盃」であつたとする証言の少なさに改めて驚いている。また、映画で見るとような盃を割る行為についての記録も、これまた少なかつた。

本稿は結論なきまま事例の列挙に終始するのであるが、「状況により様々であり、先入観による決めつけは禁物」ということがお分かりいただければ幸いである。

二、事例集

事例は左の様に区分して纏めることとする。

・水あるいは酒以外の事例

・酒であつたとする事例

・その他、酒宴を想起させる事例

・出陣式と乾杯と肴

(1) 水あるいは酒以外の事例

ここではいわゆる水盃や酒以外の事例を紹介する。これを訣別を意味する本来の意味の水盃と取るか、アルコールによる影響に配慮して水などを酒に見立てたと取るか、筆者は後者ではないかと推測する。本来意味の水盃は、軍人だけでなく銃後の人々たちも、儀式上ではなくひそかに肉親と交わした記録の方が圧倒的に多いのである。

【靖国隊々内地飛行場より戦地へ前進】

① やがて門出の乾杯が始まった、白き机の上に並べられたコップになみなみと

つがれたサイダー、晴れの門出である、酒、葡萄酒、ウイスキー……なんでも望み通りといふ上官からの意図であつたが、若き荒鷲達はその総てを辞退したのであつた、純粹な若鷲達の希望、門出の盃の一杯にも彼等の美しき性格の現れがあつたのだ

『毎日新聞』(昭和二〇・一・二八)

【一六五振武隊 佐野飛行場(大阪)】

格納庫の前に白布をかけたテーブルを並べ、出撃する園部隊(一六五振武隊)の隊員と見送る石澤(一四五隊)、藤原(一六六隊)、坂田隊(一六五隊)の面々は、テーブルの両側に整列した。川田少佐が、短い送別の言葉をのべ、そのあと乾盃した。酒ではなく、それはただの水であつた。

『十五時五分前』

【第七七振武隊 知覧飛行場】

午後四時、列線に二五〇キロを爆装した七七振武隊の乗機九七戦が引き出され、発進準備完了である。チョコ一杯の水盃を交し、簡単な送別の辞で出撃の儀式を終え、須山少尉から全員の健闘を祈ると励まされそれぞれが愛機へと急いだ。

『陸軍少年飛行兵史』

【第一〇八振武隊 知覧飛行場】

四月十六日、五時起床。〃七時、第三次

沖繩総攻撃命下る。真鍋隊十二機は第四梯団として出撃と決定。所定の七時少し前、「特別攻撃隊出撃用意」の伝令が飛ぶ。すでに飛行場は轟々と爆音を立て、十二機が二五〇キロの爆装も勇ましく、機首を並べている。隊長以下、隊員が整列した。司令の訓示が終わり、水盃を交わしたあと、真鍋隊長が力強く叫んだ言葉は短かった。「しつかりついてこい！」一同われ先にと愛機に駆け寄った。隊長の手が前後に振られ死への動きが始まった。

『別冊一億人の昭和史 陸軍少年兵』

(2) 酒であったとする事例

【第三攻撃集団(徳之島・知覧) 文書二件より】

『振武隊指導及出撃要領』

出撃者ハ当分ノ間ハ始動開始前概ネ一時間ニ旧戦闘指揮所ニ集合 此ノ際簡單ニ乾杯ノ準備ヲナシオクモノトス

『振武隊員ニ与フル注意』

出撃直前ハ乾杯以外ハ絶対ニ飲酒ヲ禁ズ

(『魂魄の記録』

【第二〇戦隊(特攻掩護) 比島カローカイン飛行場】

本日もまた特攻機の出撃だ。軍司令官富永中将が参謀とともにまた見送りに来た。今日もまた私は直掩機だ。恒例の出陣式

が行なわれる。特攻隊とともにわれわれ直掩機も横隊に並んで恩賜の酒をふる舞われた。茶碗酒だ。私は全く飲めないで、飲む真似をしなければならぬ。一度口に含んでからハンカチをだして、それに吸い込ませた。

『戦塵日記』

【第八六振武隊 各務ヶ原飛行場】

二十年六月中旬、いよいよわれわれは特攻基地に向うことになった。ひとまず長野市の飛行場に待機し、九州方面の敵機来襲情報とにらみあわせて出発するべく、われわれは各務ヶ原と永遠の訣別を交すときがきた。飛行場の一角に杯や酒が白い布を張られたテーブルの上にあった。部隊の上級将校が整列する前に、テーブルをはさんで二ヶ隊が横隊に同じく整列した。部隊長から最後の訓示をうけ、門出を祝う酒が陶器の白いコップにつがれた。一斉にぐーとのみ干す。

『生命若く燃えて』

【第二九振武隊 知覧・喜界ヶ島飛行場】

① 四月七日・知覧飛行場

戦闘指揮所参謀等数人の将校が白い布で覆った机の前に立ち並んでいる。九段特別攻撃隊の四名は、その机の前に整列し、

隊長中村実少尉が戦闘指揮所参謀に向かって「第二十九振武特別攻撃隊中村実少尉

ほか三名の隊員は只今より沖繩に展開する、敵艦船を捕捉し体当たりを敢行し轟沈するため出発いたします」と申告したのである。その場で戦闘指揮所参謀から、中村少尉を皮切りに及川伍長、山田伍長、上川伍長と一人一人盃を手渡され酒を注がれながら、「成功を祈る」と激励と決別の意味の交わりであった短い言葉と一緒に握手をされたのである。

② 四月十四日 喜界ヶ島飛行場

飛行場の出発点近くには、知覧飛行場出発のときと同じような、白い布で覆われた机が置いてあり、そして一升瓶が備えられている。(中略) 第六航空軍知覧戦闘指揮所派遣の将校によって、及川伍長と上川伍長が机の前に呼び出され、知覧飛行場出発の時と同じような、紋切り型の激励の言葉を受け、差し出された別れの盃の酒を飲み干す。二人は飲み干した盃を山田伍長に手渡し、「先に行くぞ」と一言言い残し、及川、上川両伍長の唇をつけた盃の酒を口に含んだままの山田伍長と三人相寄り無言で互いに手と手を固く握り締め合ったのである。

『さくら花』

【第四五振武隊 知覧飛行場】

いよいよ三角兵舎を出て、準備されていたトラックに乗り込み、他の隊の人達と

共に参謀以下見送りの人達の待つ飛行場へと行く。そこで「攻撃目標は沖繩本島中城湾周辺の敵艦船云々」との命令を聞いたあと、最後に参謀自ら注いで貰った茶碗の中の冷や酒を一気に飲み干す。

『猛き鷲の子 雲の墓標』

【第一〇一戦隊 (特攻掩護) 都城飛行場】

我々の基地に来た特攻隊士は一泊して爆装をすますと、戦隊指揮所の前に設けられた出陣祝の神酒を汲みかわし、戦隊長に訣別の挨拶をするや勇躍して離陸していった。

『第百飛行団の軌跡』

【第二〇振武隊 徳之島飛行場】

司令部に到着した。作戦室に通される。

(中略) 『この地図に示された艦艇の位置は友軍偵察機よりの状況報告である。

敵軍は今暁六時を期して沖繩本島に上陸を開始する模様、諸君はその先陣として沖繩西海岸に集結している敵艦艇を撃滅せよ』と命令を受けた。そして小さな盃に酒をついてくれ、『諸君の成功を祈る』と乾杯。

『猛き鷲の子 雲の墓標』

【第一〇五振武隊 知覧飛行場】

四月二十八日

昼食後、三角兵舎の当番兵に別れを告げ、

出撃のため飛行場に行く。一杯の酒と塩こんぶ、するめなどによる簡単な出陣式であった。

『特攻残記』

【第三〇振武隊 徳之島飛行場】

裸電球が灯る司令部に入り攻撃集団長に出撃の申告、「横田少尉、横尾伍長、只今出撃致します」と申告を終わり集団長の手から盃を受け、空いている左手の平に缶詰の牛肉一切れとパイナップル一切れを載せて貰い、別盃を干す。一気に盃を傾け、酒とは違った焼酎と思われる強烈な地酒で、口内と食道に火でも付いたようになり、思わず噎せ返りそうになるのをグッと堪える。形式的ながら出撃の式を済まして飛行場に向かう。

『積乱雲』

【第四三二振武隊 万世飛行場】

日の出近い空に雲は張り詰めて居るが大分明るくなってきた。ピスト前に白布を覆った机の上に、別杯の用意がなされている。参謀、戦隊長が顔を揃え、我らも机の両側に立ち並んだ。参謀と戦隊長が我が隊長以下我々一人々に酒を注いで回る。(中略) 参謀の短い送別の訓示があり、互いの健闘を祈りながら杯を乾す。もう二度と飲むこともない旨い酒を、飲

み納めに杯を重ね喉を潤す。『懂れた空の果てに』

【飛行第二六戦隊 花蓮港飛行場】

昭和二十年五月十七日、午後四時。台湾は東海岸、花蓮港飛行場のお粗末な戦闘指揮所の前である。ジリジリと灼けつくような南方特有の日射しが照りつけ、風はそよともしない。湯呑茶碗が我々の手に渡された。参謀が持参して来た司令官心づくしの清酒は、部隊長の手で注がれた。乾盃。「御成功を祈る。」誰の口か、ぽつりと漏れた。成功？成功？私には胸がしめつけられた。こんな残酷な門出があるうか

『会報特攻』第七号別冊

【誠第一二三飛行隊 台中・八塊飛行場】

師団参謀部とは、有能な人の集団と思うが、私が台中及び八塊飛行場に前進中に会った若い参謀達は、特攻出撃毎に台北の司令部から、下士官が操縦する高練に同乗「恩賜のタバコと神酒一本」を恭しく持参して来たが、出撃特攻隊員に対し、一言の激励する言葉をかけるわけでもなく、毎回、戦隊長の横で隊員を見詰めているだけで、何のため台北から出張して来たのか、単なる儀式のため、タバコと清酒を持参するのなら、貴重な燃料の無

駄遣いではないか、と思った。

『会報特攻』第二十七号

【第六六振武隊 万世飛行場】

最後の小宴が開かれた、粗末な机を飾る豪華な花束、薫り高き冷酒―然し隊員は誰一人として杯を重ねようとするものもなかった

『死に行く自分達がこんなによい酒をいたぐくなんて勿体ない話です、夜も昼も汗みどろになって働いてゐる銃後の人たちに飲ましてやつて下さい』

『朝日新聞西部版』（昭二〇・五・二四）

【第一一〇振武隊 知覧飛行場】

出撃の申告が終わると略式の神事によって乾盃が行なわれた。十メートルほどの間隔に日本の竹が立っており、その間に二本の竹が立っており、その間に細い注連縄が結びつけられてあった。縛帯を着用したままそのしめ縄をくぐると、細長い机が一つ置いてあり、白布の上に恩賜の酒だという銘酒正宗が吾々のために用意されていた。盃に一杯ついでもらい、グツと飲みほした。頭付きのニボシもかじつた。略服の神官がやって来て注連縄の前で祓をしてくれた。いよいよ神に召されて沖繩へ征くのだと思った。

『大空は父なりしか』

【第六三振武隊 万世飛行場】

やがて出陣式が行われました。型どおり白布をかぶせた細長いテーブルに、二列に向き合つて並び、御賜の酒、煙草が下給になりました。（中略）みんな私のところへ来て、明るく談笑していました。佐々木軍曹が私の前にある、わずかに残つていた酒を指して、「隊長殿、その酒の

んでもいいですか」「ああいいよ」緊張のほぐれる一瞬、あつけらかなの性格そのものの童顔からは死に行く者のかげりは微塵も感ぜられませんでした。

『あかねぐも』

【一一三振武隊 知覧飛行場】

やつと作戦司令の訓示は終わった。型通り、私達は冷酒を汲んで別盃した。少しも酒の味というものがなかった。まるで水でのもんでいるみたいだった。朝の食事はあれほど美味に感じたのに。

『消耗人間』

【司偵振武隊 海軍鹿屋基地】

基地司令から湯呑に冷酒がつかれ、乾杯、食事時間ではないが特に巻寿司（缶詰）の食事が、この二名には配られた。しかし冷酒も口に含んだだけで、誰も寿司など食べる者はいなかった。

『生命若く燃えて』

【第七三振武隊 万世飛行場】

午前十時ごろ、全員が本部前に集合、戦況説明や細部の注意があり、各人に地図が渡された。地図には沖繩の方位や艦船の位置も記入してあった。ピスト（控所）前には白布を掛けた机の上に別杯の用意がなされ、参謀（、）戦隊長が一人一人に酒を注いで回る。最後の酒で喉を潤す。

別杯の式も終わり、隊員一同横列に並び出撃の申告を行い、隊長の号令で東の空を仰いで宮城を遥拝して・・・

『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦（兵士編）第九卷』

【第二〇一神鷲隊 黒磯飛行場】

高品師団長をはじめ、土井高級参謀、倉澤次級参謀もきた。高品閣下の訓示のあと、恩賜の神酒が身にしまつて咽喉もとを過ぎたことを感銘ふかくいまも思い出す。

雑誌「丸」昭和四八年十一月号

【第二〇八神鷲隊 黒磯飛行場】

高品少将主催の壮行会が鳥の目兵舎の雑木林の中で行われた。冷酒、勝栗、するめという悲しいまでの乾杯であった。送り送られる者の命を懸けての別杯である。

『会報特攻』第二十七号

【第二五三神鷲隊 黒磯飛行場】

八月十三日、出撃命令（中略）高品飛行

団長出席のもとに出陣式。冷酒で乾杯し  
トラックに分乗し飛行場に向かう。

『陸士五十七期航空誌 総合編』

【隊号不明 第十飛行師団隷下神鷲隊  
下志津飛行場】

「神鷲隊」の連中は、下志津で連日特攻  
訓練に徹す。訓練が終わった攻撃隊は六  
機編成で当隊から誘導機に先導されて目  
的地に向かうこととなった。(中略)

私も出陣式に立ち会ったが、出撃に際し  
特攻隊員は飛行場で別れの宴を張る。我  
が師団から初めての出陣式には賀陽宮殿  
下、片倉飛行団長も出席され、恩賜の酒  
と煙草が配られ、一人一人と挨拶を交わ  
され激励をされたが、その場の雰囲気は  
さほど緊迫した悲壮感は無かったと記憶  
しています。

『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦  
(兵士編) 第一五巻』

(3) その他、酒宴を想起させる事例  
ここでは「酒」の文字はなくとも酒宴を  
匂わせるような回想を集めた。肴を用意  
した例はここにも多数ある。

【第五十七振武隊 下館飛行場より前進】

第十六飛行団司令部員の野田毅少佐  
の日記より。

五月十七日 曇 下館

第五十七振武隊出発の日である。(中略)  
簡単な野戦の乾杯、鯉節、勝栗、する  
めなどで再び還らざる花は蕾の稚児桜の  
門出を祝う。今更残る者(何れまた特攻  
の後に続く必然性を持った我々)は言う  
ことはない。断乎征く者も言うことはな  
い。ただただ成功以外に祈る何物もない。

『野田日記』

【都城飛行場 第一特別振武隊】

敵主力空母那覇近海に出現の情報がか  
某基地部隊本部に齎された、神機到来、  
かねてこの日を待ち侘び待機中の精鋭陸  
軍特攻隊振武隊に出撃の命は降った、部  
隊本部に集まった隊長林少尉ほか隊員の  
面は一瞬殺気を帯び、決意の色がありあ  
りと漲った、出撃を前に狭い本部の一室  
でさゝやかな壮行の宴が催された、(中  
略) 壮行の宴といつても僅かに料理はす  
るめだけ最後の杯をぐつと飲みほす隊員  
の顔は何ら平等と変るところがない

『朝日新聞東京版』(昭二〇・四・一〇)  
【第二四四戦隊(特攻掩護) 知覧飛行場】

「全員整列」の声がかかる。白布を張つ  
た長テーブルをはさんで特攻隊員と戦隊  
員と向き合って並んだ。私は末端に立っ  
た。戦隊員三十名ぐらいでほぼ同じ数の  
特攻隊員である。長テーブルには、素焼

ちあわび

の銚子と盃(神棚と同じ)が並べられて  
いる。軍司令官の落着いた声での、訣別  
の辞が述べられて「成功を祈る。乾杯」  
があり、一斉に盃を乾した。

『知覧文化』三十二号

【第四三三振武隊 知覧飛行場】

「青木少尉以下六名は、沖繩周辺の敵艦  
艇を捕そくせん滅するため、ただいま出  
発します。」「成功を祈る。」司令官の  
励ましの言葉であった。スルメをさかな  
に別れのさかずきを交わしたあと、私た  
ちは飛行機に乗り込んだ。

『特攻基地』

(4) 出陣式と乾杯と肴

陸軍における「出陣式」は陸軍礼式の昭  
和一五年改正により定められた儀式であ  
る。その改正理由書いわく、「其ノ首途  
ニ於テ之ヲ行ヒ愈々団結ヲ鞏固ニシ一死  
報国ノ覚悟ヲニスルモノトス」とあった。

その式次第は軍旗に関わる部分を略する  
と、部隊長による閲兵、部隊長訓示、宮  
城遙拝である。乾杯は訓示の後に行われ  
たような記述が多く見られる。

出陣の儀式は古くからあり、「三献の儀  
式」として武人の出陣に際して行われて  
いた。その肴として出されたものは「打  
ちあわび」「勝栗(搗栗)」「昆布」で

あり、「打って、勝って、喜ぶ」という、めでたい語呂の良さから三品に限られたという。(『武家戦陣作法集成』)本稿で引用した特攻の事例では、するめ、勝栗、昆布が多く見られる。するめは関西大学学報(昭和十三年一月)『出征と凱旋式の故実』によると、流通している打ちあわびは粗製で食用とならないため、その代用とするめを出すものという。すると、特攻の出陣式で供された食品は縁起物が多い事が分かる。鯉節は「勝男武士」に通じるからであろうか。いづれの食品も保存食で、入手が容易であった←ためでもあろう。その作法は打ちあわび酒←勝栗←酒←昆布←酒の順で、三つ重ねの素焼の盃をそれぞれ三口で呑み干すものである。(三々九度)この際、必勝祈願として盃を割る場合もあるという。陸軍航空特攻において盃を割った記録は非常に少なく、陸軍の事例で探し得たのは左の一例のみである。

【第二二振武隊 知覧から徳之島飛行場へ前進】

型通り乾杯し、盃を叩き割り、いよいよ出陣である。各自銘々の故郷へ向い最後の黙祷を行う。

『特操一期生史』

盃を割る行為は現在「かわらけ投げ」と称し、厄落しや願掛けのため行っている神社もある。これも出陣式が元になっているという。その場、その時によって雰囲気は異なっていたのだろう。「型通り」という記述が良くそれを表しているが、それとは逆に会食に近い形式で正に「宴」となった場合があったようである。三、おわりに代えて

く受け継がれる想い

高知県の酒造会社である酔鯨酒造はホームページに「創業者が酒造りを始めた理由」として次のエピソードを掲げている。

「腕のいいパイロットであった窪添は戦友が特攻に向かう際、その誘導係として活躍しました。その戦友たちが特攻に向かう際、最後に飲むのはまずい日本酒だったそうです。とにかくお酒が好きだった窪添は終戦後お酒の販売の仕事をしました。かつての戦友たちへの鎮魂の願いも込めてか、自分の手で品質の高いお酒を造ることを志し、地元の酒蔵を買収し、お酒造りに情熱を注ぎました。」

この創業者とは窪添龍温中尉(航士五十期)である。氏は第一〇〇飛行団隷下として都城に展開し、特攻機の直接掩護に任じた飛行第四七戦隊に所属していた。

『陸士五十七期航空誌 総合編』には、五月二五日、沖繩総攻撃の時、第五八振武隊長高柳 隆少尉を直掩させていた。彼と同じ基地(都城東)から発進した。(中略)開聞岳を右に見て何時ものコースを、常に一〇〇〇〜一五〇〇m上空を細心の注意を払いつつ飛行し、無事鳥島上空に達した。高柳君も上空を見上げてお礼をいつてくれたであろう。私も隊長機に再三手を振った。快晴、紺碧の洋上に何時までも翼を振りつつ最後の訣別をしたのである。」との回想を寄せている。

なお、靖国神社の大手水舎向かいにある全国靖国献酒会の額を見ると、同社の名も連ねてあった。窪添氏は既に故人であり、直接的な思いについて触れる事は叶わなかったが、その断片は今も受け継がれているのではないかと想像する。

戦没者の鎮魂を祈って、今夜は冷酒で「献杯」。

☆おわり☆

陸軍特別攻撃隊に捧ぐ

元会員 高橋 圭子

さくら花かな 愛し・悲しき 十首

詠み人 元会員 高橋 圭子 (九一歳)

施設入所を機に顕彰会を退会された高橋さんより、特攻隊員を偲ぶ短歌を詠んだのでぜひ会報に、とお寄せ下さいました。

お手紙が届いたのが三月二六日、丁度特攻隊全戦没者慰霊祭の日の事でした。

桜の花が美しく咲き誇る中での挙行と聞き及んでいます。比島特攻の鉄心・勤皇・皇魂・皇華・進襲隊、沖繩特攻の第四五・第六三・第六四振武隊等の隊員たちと親交のあった彼女は手記の中で次ように述べられています。

歴史的な意味はともあれ、またどんなに人の心が変わろうとも「桜花」を合言葉に、比島や沖繩の紺碧の海に骨を埋めた、あの若者たちのことは絶対忘れられません。子供に、孫に、伝えずにいられません。とめどなく流れるこの涙は、決して浮わついた賛美でもなく、灰色の悔恨でもありません。国防、すなわち家族への愛、とあるがままに信じていたあのころ、散華することに短い青春の総決算を賭けて悔いなかった若者の魂を、理屈

なしに懐かしみ、もう一度逢いたいと希う、それだけで精一杯の思いなのです。  
(生田淳『陸軍航空特別攻撃隊史』)

【戦 中】

小一の国語は「サクラ」十代で

「桜」と散りし 特攻君ら

○昭和に入つての小学校一年生の国語の教科書には初めのページが「サイタ サイタ サクラガサイタ」

夫の志願 止め得ず若き母桜

蕾と入水す 特攻の秘話

○第四五振武隊藤井中尉と妻・二人の幼子を偲んで。

出陣命令近し まだ少年の肩を組み

声囁れ歌う「同期の桜」

命令を待ち古里を恋う胸中には 村に溢るる桜見えしか

今生の名残り特攻の兄妹 皆と登りし葉桜の丘

「矢と桜」 女学生描きし翼つらね

特攻出陣涙に送りき

○高橋さんの家は六四振武隊の営外宿舎であり、その縁で特攻機の尾翼マーク

(矢に桜の図案)を描く作業に参加。

【戦 後】

市ヶ谷の空に御霊の集いし日

「桜花」一吟ひたに献げき

○昭和五四年陸軍航空碑第二回碑前祭にて高橋さんは短歌三首を朗吟した。いく千の兵の化身か吹雪散る

桜は何を言いたかりしか

特攻に目撃者なし かの桜花の

散り際知りたし亡き日また来る

○彼女にとつてこの「桜花」は第四五振武隊・鈴木邦彦少尉(航士五七期)

敵艦沈め愛機と碎け燃え墜ちし

兵らを悼むわが「花吹雪」

○高橋さんは、『花吹雪』という追悼集を遺族向けに発行。

(航空碑慰霊祭での献花)

桜花 三首

春ごとに 帰りに咲くと言逝きし

桜は愛し 魂祀る辺に

花吹雪 舞ふ中空に 拝めば

益良雄 どのの面輪 頭ち来つ

桜花 世に咲く限り 武士の

まことの心語り 継ぐべし

(大槻健二 記)

顕彰譜 (6)

会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第六回目です。

神風特別攻撃隊 第三次龍虎隊



建碑の由来

もう何も思うまいもう何も思うまいと思う  
ほどこみ上げる父母への思慕故郷の山河  
今生の別れの臉にかぶ月影

淡く孤独を伴に無量の思いを抱き

唯ひたすら沖繩へこの胸中いかにとやせん、

あ、壮絶の死 真に痛恨の極みなり

一九四五年七月二十九日夜半

神風特別攻撃隊第三次龍虎隊

上飛曹 三村 弘

飛曹 庵 民男

同 近藤清忠

同 原 優

同 佐原正二郎

同 松田昇三

同 川平 誠

義烈七勇士は日本最後の特攻隊として

世界恒久の平和念じつつこ宮古島特攻

前線基地を離陸沖繩嘉手納沖に壮烈特攻散華す

その武勇萬世に燦足たり

願はくば御霊安らかに眠られよ父母のみむねに

神風特別攻撃隊龍虎隊一同

一九四五年七月二十九日

神風特別攻撃隊第四次龍虎隊員

滋賀県水口 笹井敬三 建立

所在地 沖縄県宮古島市平字東中根九六八一

# 高知海軍航空隊之碑



## 碑文

太平洋戦争が熾烈を極めた昭和十九年三月日本海軍は偵察搭乗員育成の急務に迫られこの地に偵察練習航空隊を開設した  
未曾有の国難に殉ぜんと二千有余の隊員は日夜猛訓練に励み訓練を終えた若鷺達は順次決戦の高空へと飛び立っていった  
この間襲来する敵機との対空戦闘や訓練中の事故等で多くの隊員が犠牲となり無念の涙を呑むという痛ましい事態もあつた

然るに戦局は好転の兆しを見せず遂に最後の手段とも言うべき一機・一艦体当たりによる特別攻撃が決行されるに至り二十年三月新たに「神風特別攻撃隊菊水部隊・白菊隊」が編成され訓練用として使用していた機上作業練習機「白菊」が次々とこの滑走路より飛び立ち南九州鹿屋特攻基地から沖縄作戦に参加した

二十年五月より六月にわたる四次の攻撃で二十六機・五十二名の隊員が敵艦船に壮烈なる体当たりを敢行し多大の戦果を挙げたるも惜しいかな僅か十七・八歳の少年飛行兵を含む若く尊い生命が沖縄の空に散華した

二十年八月太平洋戦争終結と共に僅か一年六カ月をもって高知海軍航空隊は解散され数々の悲話を秘めた短くも悲しいその歴史を閉じたのである

今曾ての同志この地に相寄り往時を偲び再びこの悲劇を繰り返すことなく永遠の平和を誓いながら「鎮魂」の文字を刻み殉国の友の御冥福を祈る

昭和六十二年五月二十四日

高知海軍航空隊元隊員有志一同

所在地 高知県南国市久枝字大湊 高知龍馬空港 東南隅  
建立 昭和62年5月24日

(高知空第一次白菊特攻隊沖縄突入日)

海軍航空

# 徳空戦没者慰霊観音像

(徳島海軍航空隊)



**観音像のいわれ**

昭和20年春に突如として徳島海軍航空隊では戦局の激変のため従来の練習飛行による訓練が中止となり、戦況の深刻な事象によって特攻特別攻撃隊編成が決定された。

自衛の術の他に、殊に力強い攻撃は月明夜間のみに行われるのが望ましい。

沖繩決戦に突入し、九州の基地から毎日の小機を機内にこした特攻隊が連続して出撃している時、連隊自衛隊は危険な夜間の飛行に訓練に手を付した。一軍のため、恐らくも犠牲者を送らざるを得なかったが、お栗原野原、廣瀬すへき様のお上をおせ、訓練を再開した。

練習、戦中5月と6月、秘を謀って徳島海軍航空隊基地に出陣した連隊自衛隊は、月明を度び五次にわたり沖繩軍艦隊の米軍艦艇に壮烈な夜間特別攻撃(1機に2名犠牲)を行行し10名の戦死者を慰霊のため設置した。

上記の他、訓練途上平瀬の事故による殉死者2名、米機攻撃による戦死者2名、海難を来した自衛隊員2名、特攻に参画した戦没者2名、など、合わせて10名の犠牲者、多なおこの観音に寄まつている。

これらの戦没者の冥福を祈望し、その尊厳を後世に伝承せんがため、戦没者の慰霊用として「徳空会」を組織してこの観音像を建立した。

昭和49年 徳空会

## 由来記

沖繩航空特攻作戦も後段5月下旬の菊水七号作戦以降は、実戦機も欠乏したので九三式中練や白菊まで投入されることになった。

徳島空は偵察練習隊であったが、特攻出撃の命を受けて徳島白菊隊を編成し、串良基地に進出して出撃すること5回に及んだ。白菊は低速のため困難な月明の夜間攻撃戦法をとらざるを得なかった。まことに悲壯というべし。

- 第一回 10機 20名 (5月25日)
  - 第二回 7機 14名 (5月28日)
  - 第三回 4機 7名 (5月29日)
  - 第四回 3機 6名 (6月21日)
  - 第五回 5機 10名 (6月26日)
- 計 29機 57名。

慰霊観音像は昭和49年関係者が徳空会を結成し、特攻戦死者の外訓練殉職者(26名)、空襲戦死者(21名)、戦病死者(2名)、自決者(3名)を合祀し、その鎮魂と戦功顕彰のために建立した。

毎年慰霊法要がとり行われている。

**所在地** 徳島県板野郡松茂町  
**建立** 海上自衛隊徳島基地資料館内  
**写真提供** 昭和49年 海上自衛隊徳島教育航空群

海軍航空

# 姫路海軍航空隊 鶉野飛行場 神風特別攻撃隊白鷺隊の碑



神風特別攻撃隊白鷺隊は、姫路海軍航空隊員により編成され、この地鶉野飛行場において日夜訓練を重ねた。

隊長佐藤清大尉以下六十三名は、その保有する艦上攻撃機二十一機（一機出撃直後不時着）をもって、昭和二十年四月六日より五回にわたり鹿児島県串良基地より出撃し、沖縄周辺の米軍艦艇にたいし飛行機もろとも体当たり攻撃を加え、壮烈な戦死を遂げた。

戦いは遂に国土防衛戦に入り、膨大な物量を誇る米軍の強襲に、わが沖縄守備隊の戦力では如何ともしがたく、菊水作戦が発動され航空機による特別攻撃隊の投入となり、海空による総攻撃が開始されたのである。

姫路空白鷺隊も決然としてこれに加わった。隊員たちは出撃にさいし、遙か故郷の愛する家族らに別れを告げ、再び還ることなき特攻に若き命を捧げ、武人の務めを全うしたのである。

今ここ鶉野の地に碑石を建立し、この史実を永世に伝え、謹んで殉国された勇士の御霊をお慰めし、併せてそのご加護により永遠の平和の実現を切に願うものである。

- |            |
|------------|
| 白鷺隊突入      |
| 4月6日一三機三九名 |
| 4月12日三機九名  |
| 4月16日二機六名  |
| 4月28日一機三名  |
| 5月4日一機三名   |
| 計二〇機六〇名    |

所在地 兵庫県加西市鶉野町  
 建立 平成11年10月9日  
 問合せ先 〒六七五-二一〇三  
 兵庫県加西市鶉野町二一九三番地  
 鶉野平和祈念の碑苑保存会  
 （鶉野飛行場資料館）  
 （〇七九〇-二一九〇二五）又は  
 加西市ふるさと創造部鶉野未来課  
 （〇七九〇-四二一八七七）

連載山ある記18

埼玉県「物見山」  
会員 池田 康博



金毘羅神社から見下ろす巾着田

奥武蔵の山は、低いが登山道もよく整備されハイキングに最適、桜の残る暖かい日和の中、西武秩父線高麗（こま）駅からスタートし、日和田山から、高指山を通って物見山へ登り、下りは「北向地蔵」を経由して、途中の「五常の滝」に寄って武蔵横手駅まで約8.4kmのコースを歩いた。

高麗駅を9時25分に出発し、高麗本郷の日和田山登山口まで15分、登山口の駐車場脇には、女性初のエベレスト登頂を果たした田部井淳子さんのレリーフがあった。その偉業の基礎は、若き日に通った日和田山での登山訓練であったと書いてある。この山にはロッククライミングの練習場があるので、再び登山道が合流するのは、金毘羅神社が鎮座する地点である。ここからの眺望は素晴らしい、眼下の高麗川が湾曲して作った「巾着田」もはっきり確認できた。神社の脇を抜けるとすぐ山頂で到着は10時23分であった。標高三百五mではあるが、山頂も眺望は良くて越生、日高市街が望めた。小休止の後、急坂を少し下って、再び針葉樹の道を登って行くと高指山である。しかし、ここには山頂に電波中継塔があり、立ち入れないので更に進むと、駒高という集落が現れた。ちよつとした秘境感を感じながら再び山道に入り、登って行くこと約50分、11時11分に物見山に到着した。標高は三百七十五m、開けた山頂部は多くの登山者で賑わっている。

物見山という名の山は各地にあって、どの山もその昔、見張りなどに使った山なのだろうと思うのだが、現在は木が茂って見晴らしは良くない。しかし、広い山頂部にはテーブルやベンチが備えてあり、お腹もすいてきたのでここで昼食にした。

この山は一等三角点がある山なので、食後、その標識を探していたら、近くの女性が「本当の山頂はもうちよつと行った所ですよ。」と教えてくれた。百mほど歩くと、



物見山の山頂部

をどんどんと下って14時6分に武蔵横手駅に到着、約3時間半の山歩きであった。

きつとそちらの方だろうなと思いつつ、私とは言え、登山道の途中にある男坂と女坂の分岐でも女坂を選んで登った。

再び登山道が合流するのは、金毘羅神社が鎮座する地点である。ここからの眺望は素晴らしい、眼下の高麗川が湾曲して作った「巾着田」もはっきり確認できた。神社の脇を抜けるとすぐ山頂で到着は10時23分であった。標高三百五mではあるが、山頂も眺望は良くて越生、日高市街が望めた。小休止の後、急坂を少し下って、再び針葉樹の道を登って行くと高指山である。しかし、ここには山頂に電波中継塔があり、立ち入れないので更に進むと、駒高という集落が現れた。ちよつとした秘境感を感じながら再び山道に入り、登って行くこと約50分、11時11分に物見山に到着した。標高は三百七十五m、開けた山頂部は多くの登山者で賑わっている。

物見山という名の山は各地にあって、どの山もその昔、見張りなどに使った山なのだろうと思うのだが、現在は木が茂って見晴らしは良くない。しかし、広い山頂部にはテーブルやベンチが備えてあり、お腹もすいてきたのでここで昼食にした。

この山は一等三角点がある山なので、食後、その標識を探していたら、近くの女性が「本当の山頂はもうちよつと行った所ですよ。」と教えてくれた。百mほど歩くと、なるほど木に囲まれた場所に標識が設置されていたので、ここにタッチして12時15分、先を目指して出発。ここからは快適な遊歩道で12時47分に北向地蔵に到着した。

このお地蔵様は、案内板によると天明3年の浅間山大噴火後の悪疫の流行を防ぐため建立されたようで、栃木市の岩舟地蔵尊と向き合うように建てたため北を向いているという。地蔵尊に参拝し、昔の人の信仰心に触れた後、舗装された林道を横切り、「五常の滝」を目指して下りに入った。

13時30分に入園料を払って五常の滝に着。小さな滝ではあるが、滝は不思議に見飽きないもので、しばらく滝を眺めて、13時41分に駅に向けて出発。舗装された林道

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● ハルピンの ソフィスキー寺院住むものは  
破壊せしドームに 顔出す小鳥

● 日本語を 片言も話せぬ孤児なのに  
心を込めて 「七つの子」を歌ふ

松花江

● 満開に 咲きし桜の そのなかで  
今年も逢えし 在天の君

● 舞い落ちる 桜の花の 花びらに  
映るは君の 去り征くすがた

淳子

● 鼻出しが やけに気になる マスク顔

● 正露丸 元に戻すぞ 征露丸

ねこ



**事務局からの連絡事項**

令和四年度第一回定時理事会(4・2・22)と定時評議委員会(4・3・15)において令和3年度の事業報告及び決算が承認され内閣府に報告したので会員各位にご報告します。

**令和3年度事業報告書**

**一 慰霊事業**

1 第42回特攻隊全戦没者慰霊祭  
 令和3年3月27日(土)11時より、靖國神社に於いて実施した。参列者は引き続き新型コロナウイルスの影響により、参列者の安全を考慮し、昨年同様、顕彰会役員等による昇殿参拝を行い、英霊への慰霊の誠を奉げることができた。慰霊祭後、遊就館前に有る「特攻勇士の像」への献花を行い散会した。

2 第70回特攻平和観音年次法要  
 9月23日(木、祝)秋分の日の午後2時より、世田谷山観音寺に於いて、新型コロナウイルスの影響のため例年行っている同寺と地元駒繫神社とによる神仏習合形式の齋行を断念し、顕彰会役員等のみの17名の参列で仏式のみで年次法要を実施した。

3 各地慰霊祭への参列等

(時期)

(慰霊祭名)

(場所)

(参列代表者)

3月28日	特攻勇士之像慰霊祭	宮崎縣護國神社	岩崎副理事長
4月7日	戦艦大和追悼式	広島県呉市	藤田理事長
4月11日	万世特攻隊慰霊祭	鹿児島県南さつま市	石井専務理事
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉縣護國神社	石井専務理事
7月10日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	石井専務理事
8月15日	全国戦没者慰霊大祭	靖國神社	杉山会長
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭	茨城縣護國神社	岩崎副理事長
10月18日	秋季例大祭	靖國神社	藤田理事長
10月18日	秋季慰霊祭	千鳥が淵墓苑	藤田理事長
10月24日	特攻勇士之像慰霊祭	大阪護國神社	岩崎副理事長
10月25日	永代神楽	靖國神社	杉山会長
10月26日	特攻勇士の像奉納	長崎縣護國神社	藤田理事長
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭	埼玉縣護國神社	岩崎副理事長
11月7日	明野忠魂塔慰霊祭	三重県伊勢市	金子編集長
11月23日	若潮の塔慰霊祭	香川県小豆島	福江理事

昨年度は、令和2年度に引き続き新型コロナウイルスの感染防止対策のため、主催慰霊祭及び各地の慰霊祭が縮小ないしは中止に追い込まれ、これらへの参列も当初予定していた50か所に対し15か所にとどまったものの、一部には供花や玉串料等を奉納した。

**二 護國神社への「特攻勇士之像」建立奉納事業**

延期になっていた三重縣護國神社へ

の奉納が、令和3年8月10日に、長崎縣護國神社への奉納が、令和3年10月26日に行われた。この結果、令和3年度の奉納は2体であり、全52か所の護國神社等に対する奉納特攻像は21体となった。また、令和4年度以降の奉納に向けて、岩手、高知、山梨の各護國神社に対する説明を行った。今後も引き続き他の護國神社等への説明を継続し、多くの国民が、特攻像を見ることが

## 令和3年度正味財産増減計算書

令和3年1月1日から令和3年12月31日まで

(単位:円)

科 目	3年度決算	前年度決算	増 減	備 考
<b>I 一般正味財産増減の部</b>				
<b>1 経常増減の部</b>				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	15,303,388	14,465,984	837,404	
特定資産運用益	300,000	300,000	0	
受取会費	2,868,000	3,423,000	△ 555,000	
慰霊事業収益	996,500	1,341,000	△ 344,500	
出版事業収益	34,200	8,200	26,000	
広報事業収益	1,800	400	1,400	
受取寄付金	3,655,205	3,254,981	400,224	
雑収益	187	1,176	△ 989	
経常収益計	23,159,280	22,794,741	364,539	
(2) 経常費用				
①事業費	13,508,505	21,167,248	△ 7,658,743	
慰霊事業負担金	339,480	1,796,000	△ 1,456,520	
像制作負担金	935,000	2,002,000	△ 1,067,000	
発送等委託費	1,596,851	4,059,432	△ 2,462,581	
他団体助成金	1,459,300	2,285,900	△ 826,600	
役員報酬	180,000	180,000	0	
給料手当	3,174,594	3,796,548	△ 621,954	
福利厚生費	408,691	467,721	△ 59,030	
旅費交通費	978,983	535,511	443,473	
通信運搬費	287,459	739,100	△ 451,642	
減価償却費	110,011	55,787	54,223	
退職手当	0	356,400	△ 356,400	
消耗品費	566,446	298,934	267,512	
印刷製本費	485,509	1,594,364	△ 1,108,855	
会議費	27,325	68,832	△ 41,507	
光熱水料費	80,754	77,551	3,203	
賃借料	1,715,101	1,763,167	△ 48,066	
諸謝金	5,000	25,000	△ 20,000	
臨時雇賃金	873,600	681,600	192,000	
退職手当引当資産繰入	284,400	383,400	△ 99,000	
②管理費	6,115,249	7,332,611	△ 1,217,362	
役員報酬	120,000	120,000	0	
給料手当	2,116,396	2,531,032	△ 414,636	
福利厚生費	272,461	311,814	△ 39,353	
旅費交通費	652,656	357,007	295,648	
通信運搬費	191,639	492,734	△ 301,094	
減価償却費	73,340	37,192	36,149	
退職手当	0	237,600	△ 237,600	
消耗品費	377,631	199,290	178,341	
印刷製本費	323,673	1,062,909	△ 739,236	
会議費	18,217	45,888	△ 27,671	
光熱水料費	53,836	51,701	2,135	
賃借料	1,143,401	1,175,445	△ 32,044	
臨時雇賃金	582,400	454,400	128,000	
退職手当引当資産繰入	189,600	255,600	△ 66,000	
経常費用計	19,623,754	28,499,859	△ 8,876,105	
評価損益等調整前経常増減額	3,535,526	△ 5,705,118	9,240,644	
有価証券売却損益	△ 300,000	△ 2,856,680	2,556,680	
基本財産等評価損益	7,351,107	△ 7,406,677	14,757,784	
当期経常増減額	10,586,633	△ 15,968,475	26,555,108	
<b>2 経常外増減の部</b>				
(1) 経常外収益				
貯蔵品資産受入	0	0	0	
資産計上	0	594,000	△ 594,000	
経常外収益計	0	594,000	△ 594,000	
(2) 経常外費用				
特攻像台座	0	0	0	
貯蔵品資産償却	0	109,000	△ 109,000	
経常外費用計	0	109,000	△ 109,000	
当期経常外増減額	0	485,000	△ 485,000	
当期一般正味財産増減額	10,586,633	△ 15,483,475	26,070,108	
一般正味財産期首残高	277,686,874	293,170,349	△ 15,483,475	
一般正味財産期末残高	288,273,507	277,686,874	10,586,633	
<b>II 指定正味財産増減の部</b>				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
<b>III 正味財産期末残高</b>	288,273,507	277,686,874	10,586,633	



二 馬場しづ子  
 三 柄澤 寛之  
 三 飯田 美絵  
 三 島野 雅子  
 三 池田 守  
 三 小田部哲哉  
 三 宮倉 崇  
 四 服部 義隆  
 五 廣川 恭子  
 五 林 佐吉  
 五 堀江 正夫  
 五 平川 善人  
 五 尾中 信仁  
 五 藤元 正明  
 五 湯澤 一枝  
 五 田中 清  
 五 田村 政昭  
 五 中本ゆかり  
 五 中熊 真一  
 五 竹岡 晴人  
 五 倉田 邦男  
 五 川岸 義規  
 五 清水 典郎  
 五 森山 敏明  
 五 松浦 良成  
 五 酒見 奎一  
 五 氏家 康宇  
 五 山本 高敬

二 豊岡 久  
 三 三落合道夫  
 三 平田 重夫  
 三 藤田 幸生  
 三 中村 剛  
 三 早坂 正子  
 三 江副保次郎  
 三 阿部 隆裕  
 五 田中 正和  
 五 圓藤 春喜  
 五 明石 英次  
 五 小堀桂一郎  
 五 武安 俊隆  
 五 堂坂 清  
 五 藤井 明  
 五 島田 正登  
 五 田村 豊彦  
 五 天野 弘子  
 五 中村 真  
 五 澤田江里子  
 五 大澤 和久  
 五 前田 俊郎  
 五 斉田 孝  
 五 神林 千祥  
 五 上野むつ子  
 五 十川重次郎  
 五 酒井 陽太  
 五 市川 雄一

一 岡崎 規邦  
 二 濱田 秀逸  
 二 鈴木 馨  
 二 野村 朋美  
 二 北村菜穂子  
 二 飯田 雍子  
 二 土橋 猛  
 二 田崎 鉄男  
 二 津島 裕  
 二 大林 喜一  
 二 大森 和弘  
 二 千 玄室  
 二 青池 正夫  
 二 西村 征夫  
 二 神保 明生  
 二 松田 栄  
 二 若月 良介  
 二 山脇 智美  
 二 山本 寛  
 二 桜井 實  
 二 黒川壯之介  
 二 高井 賢一  
 二 呉 正男  
 二 近藤 建  
 二 吉田 治正  
 二 茅野 幸雄  
 二 白井日出男  
 二 阿部 敏行

一 岡崎 全宏  
 一 永富 康修  
 二 廣田 正  
 二 里崎 雪  
 二 野口 健  
 二 武藤 一彦  
 二 藤永 雅彦  
 二 渡部 晃  
 二 塚原 正  
 二 中川 昌久  
 二 大瀧 成紀  
 二 川本 修二  
 二 赤山 琢磨  
 二 西村 洋文  
 二 水町 博勝  
 二 城ヶ端 専  
 二 小林由貴子  
 二 市来 徹夫  
 二 山本 健雄  
 二 笹路 能也  
 二 根本 紘一  
 二 高山 友二  
 二 荒木 紫帆  
 二 戸祭 真生  
 二 宮尾 敏晴  
 二 館本 勳武  
 二 岡田 敏治  
 二 伊達 直哉

千 葉 山 口 尚 哉 ( 3 ・ 1 )  
 会 員 訃 報 ( 敬 称 略 )  
 廣 島 沖 村 重 行  
 愛 媛 越 智 通 雅  
 和 歌 山 南 方 弘  
 永 井 昌 弘  
 高 瀬 大 和  
 神 奈 川 杉 本 佑 子  
 中 熊 順 子  
 佐 野 幸 利  
 出 光 正 和  
 東 京 鈴 木 く に こ  
 埼 玉 國 分 雅 宏  
 新 入 会 員 名 簿 ( 敬 称 略 )  
 ( 令 和 4 年 年 1 月 1 日 ~ 3 月 31 日 )  
 一 岡崎 朋子  
 一 吉田 紀  
 一 高橋(こ)すみ  
 一 山田 元  
 一 生峯 和代  
 一 石井 敏子  
 一 大手 良之  
 一 藤野 洋政  
 一 早瀬 登  
 一 ノブレス株式会社  
 一 東洋物産株式会社  
 一 岡崎 伊平  
 一 古川 淳一  
 一 佐多 和仁  
 一 森 實  
 一 青木 義博  
 一 石垣貴千代  
 一 中田 晃文  
 一 肥塚 肇雄

東京	川辺三郎	(2)
川村一俊	(3)	
廣嶋文武	(3・5・17)	
橋本孝一	(3・6)	
飯田雍子	(3・9・27)	
太田賢照	(3・11・8)	
福原茂俊	(4・1・14)	
加藤恒	(4・1・22)	
堀江正夫	(4・3・20)	
神奈川野口清秀	(3・12・28)	
福井橋本長生	(3・12)	
山梨堀内保	(3)	
大阪石川源朗	(4・3・1)	
大渡辺尚美	(4・2・17)	
広島日野研三	(4・1・10)	
兵庫平吉一則	(4・3・26)	
香川福田光幸	(4・3・26)	
福岡竹内良雄	(3・12)	
福岡市市場敏司	(3・1・17)	
長崎鹿子島統士	(4・1・22)	
沖縄東門弘	(3・12・30)	

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちが努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



② 投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。  
〒102-0007  
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7  
東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5221-3459

FAX 03-5221-3459

E-mail [jimukyoku@tokkotai.or.jp](mailto:jimukyoku@tokkotai.or.jp)